

乙戸南雑話－福島啓舟随筆集

(花鳥風月および星と虹等を愛でながら)

主宰論説 序文

序文：

人を問わず、動・植物を問わず、生きとし生けるものは、この世に生を受けて、幼年期・青年期を通じて、十分に生命の息吹を謳歌し、生命力の高揚する壮年期を経た後は、いろいろな老化・劣化の影響を受けながら、寿命に達し、やがては土または海に帰ることになる。この寿命たるもの、長短の差があっても、いわば、その生物種生来の生命力に基づくもので、如何なるものも逆らえず、静かに死の訪れを待つことになるのは、いわば、自然の哲理である。されども、頂いた命を大事にして、限られた寿命の中で、大波小波に揺れ揺られながらも、花鳥風月や星・虹などの自然の美景を鑑賞し、動・植物の生命の息吹を感じ、一日一日の生活とまわりの人とのつながりを大切にし、夢と希望を考え、いろいろなことに感受性を持ち、天命および天寿を全うすることが、人間本来の生き方ではないだろうかと考えられる。

私が、約10年間の北九州市での生活を終えて、この土浦の乙戸南の地に戻ってから、早くも10年ぐらいになる。その間、囲碁、麻雀、クロスワード・パズル、数独パズル、グランド・ゴルフなどを楽しみながら、持病の腰の痛みなどから解放されて体調の回復を図るために、自宅近くの乙戸南公園等の周りを30分ばかり散歩することを、日課にしていた。その際、自然観察や、街並みの鑑賞、散歩中における近くの人々との会話等を通じて、折に触れ、感じたことや考えたことを、とりとめもなく書き連ねて、日々の慰みの一部としていた。また、小人閑居して不善を為さないために、いろいろの書籍や雑誌を紐解いて、考えるための糧としていた。すると、本来は見えるはずのないものが見えたり、気づくはずがないものにはっと気がついて、恐れおののいたり、また、微笑を禁じ得ないこともあった。

ともすれば、思ったほど文章が進まず、中断することもあったが、「継続こそ力なり」という言葉をもとに、書き続けることにした。手、足、肘、肩、腰、首、歯など、体のいたるところの不具合が続出し、悩まされることにもなったが、幸い、頭の働きだけは、衰えず残っていたらしい。日々の散歩や屋内での瞑想等をもとに、気が付いたり、感じたりした話題は、花鳥風月ばかりでなく、星や虹に関するものも含めて、森羅万象に関する話も含まれていると考えられる。生き方を考え、知的好奇心を満足させ、はるか遠い太古の昔からの人間の歴史を顧み、地球における生命誕生の起源とはるかなる宇宙の始まりと果てに思いを巡らし、人生に思いを込めるのに、少しは、役に立つかなと思われる。

他方、国際会議等を通じて訪れた世界各国の主な都市について、その時に感じたこと、気付いたことを、紀行文としてまとめることにした。

ここに、それらの記憶・記録を、「乙戸南雑話－花鳥風月および星と虹等を愛でながら－」というタイトルの福島啓舟随筆集としてまとめることにした。片意地を張らない、さらっとした読み物として、座右にでも置いて頂ければ、望外の喜びと考える次第である。

令和3年2月25日

乙戸南にて記す

福島敏夫（啓舟：ペンネーム）（75歳現在）

鳶と松

散歩の途中、雑木林の一角を通った。元々松林だったらしいが、開墾して栗林に模様替えし、3本の高く伸びた松の木だけが残っていた。見上げていたとき、鳶（：とび、カラスかと思われたが違うようだ）が、一本の松の木の頂部に飛び降りるのが目に入った。どうやら樹冠近傍に巣を作っているらしい。このような環境で巣を作るということに、何かうれしような悲しいような不思議な感じにとらわれた。ああ、鳥は、このような場所にでも住み着いて、たくましく生きるらしい。しばらくして飛び立っていったが、雛のえさを探しに行ったのだろうか？ 鳶のひなの無事な巣立ちを願いたいものである。

平成 24 年 4 月 19 日

俳句：松の木にとびの巣を見たおぼろ春

椿

乙戸南公園を散歩していて、椿の花が盛りであることに気づいた。春は、梅・桃・桜が観賞用に有名であるが、椿も、結構味わい深い。紅椿と桃椿の木が2本並んでいて、それぞれの花をたわわにつけていたが、根本には、落下椿が、びっしりと地面を覆っていた。椿の色は、紅白だけかと思っていたが、桃色の椿もあるのかと思うと、感慨深いものもある。日本の到るところで生息し、県花や市花になっている場合もあるようだ。また、一般的には、一重咲きだけでなく、八重咲きのものもあることを知った。椿は、花びらひとつひとつでなく、花ごとばさりと落ちる。そのため、江戸時代、不吉な花とされ、武士の家では椿の木は植えなかったという。おそらく迷信で、結構武士の家でも植えられて、その美を鑑賞したものと思われる。同種の花である山茶花と見分けが難しいといわれるが、良く見れば、その違いが分かる。

平成 24 年 4 月 20 日

俳句：桃椿盛りの果てに散りにけり

小石川散策

久しぶりに東京に出かけて、本郷から小石川一丁目、柳町を抜けて、伝通院を訪れてみた。学部学生の3~4年生の頃、近くにあった(財)加越能育英社の明倫学館という学生寮で過ごしたので、その界隈が今どうなっているのかを確かめるとともに、徳川家康の孫娘の千姫の墓があるので有名な伝通院を訪れ、しばし考えに耽った。どうやら、徳川家康の実母の於大の方のものも含めて、徳川家の女の方々の菩提寺になっているらしいことがわかった。

連休のはじめで、思いの外、暑い日であったが、連休でわざわざ混雑な場所に行かないで、このような閑静な場所を散策するのも、一興でないかと思った。

平成 24 年 4 月 28 日

俳句：運命に翻弄された乙女かな

夢

今日不思議な夢を見た。昔大学院時代に、光物性の研究の一環として、硫化亜鉛中のテルル等電子トラップ (ZnS:Te) の発光過程のメカニズムの究明を行っていた。それが今になって認められて、JSDR という研究所(夢なので実際に存在するのか定かでない)で、真空紫外線領域での光物性研究という大プロジェクトで、レーザーと高性能分光装置を使った半導体の研究を復活させる要請を受けて、昔の助手の方と一緒に携わることになった夢である。もうかれこれ 30 年以上昔の話に関連した夢をみるとは驚きである。まだ未練があるせいかな？ または今になって認められることを妄執しているのか？ 夢は、時空を超えたものであるというが、考えてみると不思議である。

夢を考えると、楽しく、良いこともあるが、最近、昔親しんだ先輩らが、一人、二人となくなっていくつつを顧みると、つつの夢や希望と違い、睡眠時の夢は、過去の思い出に関連したものが多いようだと思づく。懐古趣味のなせることかなとふと思う。

平成 24 年 4 月 30 日

俳句：夢枕うつつ幻楽しみぬ

百花繚乱

昨年の東日本大震災や原発事故および相次いで起きた風・水害で、日本は災害に見舞われやすいつことを改めて思い知らされ、また、これまでの価値観の変更も免れなかった。今年の冬は、例年になく思いの外寒く、日本海側の東北・北陸・山陰地方では、大雪に見舞われ、日本各地で春の訪れも遅かったようだ。しかし、4月30日、5月1日になり、一転してぽかぽか陽気になり、いろいろな花が一斉に開花して咲き乱れ、さながら百花繚乱の様相であった。ざっと列挙しても、レンギョウ、山吹、紫木蓮などの灌木の花、また、道端では、タンポポ、ヒナゲシ、菜の花などの花が咲いていた。春爛漫の感がした。東北地方では、桜が、遅咲きながら満開になっているらしい。植物は、季節がくれば開花し、毎年、生命の息吹を発露すること、すばらしいことではないかと思う。百花繚乱というのは、本来、いろいろの花が咲き乱れることを意味するが、転じて、美しい女性が、それぞれ、個性を発揮しながら、活躍すること、優れた人物が多く出て、立派な業績が一時期にたくさん現れることを意味するらしい。日本、地球の再生に向けて、期待したいものだと思う。

平成 24 年 5 月 1 日

俳句：輝ける命の息吹花の春

源三窟

ゴールデンウィークの後半、家族サービスの形で、那須高原の探訪を目的に、塩原温泉に一泊した。その翌日に、【源三窟】という史跡の鍾乳洞を訪れた。源義経の副将であった源有綱が、義経追討の、後白河法皇の院宣が下ることにより、義経の異母兄の源頼朝から追われることになり、この洞窟に逃げ込んで、再起を期して、2年間も家来と三人で隠れ住んでいたらしい。それにしても、このような狭い肌寒い洞窟中で、2年間も良く生き続けたということは、よほどの強い意志の支えがなければかなわないと思われた。人間は、生きるためには、ただの

んびりした生活を満喫することもさることながら、ある程度、生きがいないしは目標というものが必要らしいとしきりに感じ入った。

平成 24 年 5 月 5 日

俳句：あなかしこ源の強い意志もついえたり

殺生石

那須岳の丘陵が湯本温泉街にせまる斜面の湯川に沿って、殺生石があるが、そこを訪れた。何でも、九尾の狐の化身した大きな岩が、今でも恨みを抱きながら毒気を放ち、その近くでは、動・植物も昆虫も生息できないということであるらしい。本当は、石が毒気の源でなく、湯川で毒性の硫化水素 (H₂S) が発生するのが原因であるようだ。昔から、狐や狸が化身して人を化かすと言われているが、狐や狸にしてみれば、はなはだ迷惑な話であると思われる。何故、この 2 種類の動物のみが化身するという言われができたのだろうか？ 偏見と誤解がもたらす悪しき影響は、古今東西枚挙にいとまがない。不透明なことの多い当節、特に、自ら考えて、本物と偽物の見分けをする眼力と判断力を養い、事の本質を見極める発想が必要なのかもしれなると感じ入った。

平成 24 年 5 月 5 日

俳句：狐狸の化身の言われ人の故

燕と雀

今年も、つばめが渡ってきて飛び交うのを見かけるようになった。ところが、昨年と同じく、近くのコンビニانسストアの監視灯の上に巣を作っているのを見かけたのは、驚きである。昔は、燕の巣は、民家の軒先と決まっていたのであるが、昨今、そのような人工物に巣を

作るのが気に入っているものと思われる。近くには乙戸川の流れがあり、その一角だけは、住宅地に似合わず水田が可能であり、巣を作るための泥、わら、木枝など収集に事欠かないらしい。ところで、燕は渡り鳥であり、やがては南の方に帰ってしまう。乙戸南公園でよく見かける雀は、留鳥であり、年がら年中近くにいるが、雀の巣はどこにあるのか、見当もつかない。燕と雀、どちらも、自分の生き方に合わせて、巣を作るということらしいが、考えてみると不思議な対比である。

平成 24 年 5 月

俳句：五月晴れ鳥に見たり生きる知恵

寿命と生命力

本日 67 歳になった。小・中学校の同級生や、竹馬の友からも、高校の同級生からも、大学の教養学部同級生からも、工学部の同級生からも、大学院の同級生からも、「おまえは、勉強が少しはできるかもしれないが、生き方が下手くそだから、早死しないように気をつける」とどのような言われ方をされながら、67 歳まで生き抜けたのは、考えてみると不思議な気がする。親族も、かなりの程度癌で亡くなっているから、自分が、癌で早死にしなかったのは、親から受け継いだ生命力が強く、生来の寿命が少し長かったものと感謝すべきかもしれない。世界史に名を残すような偉人は、「この道一筋の生き方」を全うすることにより、人類への貢献の金字塔を打ち立てたのかもしれない。しかし、私のような凡人や世間一般の人は、必ずしも一つの生き方を全うできず、大波小波に揺られながら、かなりの程度、ジグザグコースを歩まざるを得ない。直線的な白黒人生を送る人は稀である。それでも、寿命というものを考えてみると、寿命というものは、ある程度それぞれの人で固有のものが決まっているのかもしれないと思うこともある。「天才は夭折する」と言われるように、才能ある人が、生命力に恵まれず、惜しまれつつ早死する人もいるし、天寿を全うして、90 歳近くまで生きて、すばらしい業績を残す人もいる。人が生き抜くためには、ある程度、情熱と信念がいると言われるが、必ずしもそれだけでなく、心身の健康と環境の面もあるのかもしれない。知力、体力、学力のほかに、生命力というものも、人の生きざまにおける重要な資質と考えられる。また、人間も

動・植物も、生を受けて、十分に生命を謳歌し、生命力が高揚する壮年期を経た後は、いずれは死して土及び海に戻ると言う自然の哲理を免れないように、建築・土木の人工の建造物も、長年経つうちには、いろいろな風化・劣化をし、あるいは、地震、火事、風・水害などの自然災害を受けて倒壊し、元の黙阿弥の状態に戻ると言う宿命を免れない。それでも、劣化のメカニズムをよく理解し、工学的な適当な配慮をすれば、医者医療行為にも似て、天寿を全うさせることも十分可能であるが、ある程度は、気候・風土とも関連してくる。材料・部材の寿命、人工建造物の寿命、文明の利器や製品の寿命、動・植物の寿命、人間の寿命、地球の寿命、宇宙の寿命など、寿命にもいろいろある。長らく材料・部材およびシステムの耐久性の研究の一環として、寿命予測もやってきたが、寿命予測が如何に難しいかが実感である。それでも、命ある限り、体が動く限り、頭が働く限りは、続けたいと思う次第である。

平成 24 年 6 月 5 日

俳句：蜻蛉は命を見つめ今生きる

◎フランスの建築等の世界遺産巡り

(この関連記事は、別原稿「フランスの建築等の世界遺産巡りの旅日記」として、まとめてある。)

平成 24 年 6 月 22 日から 6 月 28 日まで、定年退職の区切りと女房孝行をかねて、5 泊 8 日のバック旅行により、フランスの建築等の世界遺産巡りをした。モン・サンミッシェル、ロワール地方の古城群、パリ市街の建築群、ベルサイユ宮殿などを探訪した。羽田の国際線で深夜発の JAL の直行便でパリに着いた。一期一会なれども、25 人の参加者と阪急交通社の添乗員との楽しい旅である。

1) クロネード・モネの庭園と邸宅

フランスの代表的な印象画家クロード・モネ（以下モネ略称する）との庭園と邸宅は、北フランスのノルマンディー地方のウール県のジヴェルニーというセヌ川のほとりの村にある。そこを訪れて感心したのは、その広大な敷地の庭園と大邸宅である。庭園は、うまく川の水を利用し、いろいろな植物と花および池を配して、散策の際の自然の妙味を満喫できるようになっているようだ。モネは、【睡蓮】の花の絵で有名だが、結構、バラの花の名園も見事だと思われた。北フランスの地方であるので、このような広大な庭園の敷地を確保できたと思われるが、庭園の整備と維持については、モネの並々ならぬ情熱を感じた。日本の回遊式庭園の影響もあったように思われた。モネの居住と画家としての活動を行った邸宅も訪れた。その一連の作品、家具、調度品の多さと多彩には驚かされた。特に、日本の江戸時代の浮世絵のコレクションの多さには目を見張った。日本とフランスの文化伝統の結びつきに、感じ入った。

平成 24 年 6 月 23 日

俳句：紫陽花やフランス画への想いかな

2) ルーアン大聖堂と聖ジャンヌ・ダルク教会

ルーアンは、モネが住んでいたジヴェルニーから少し離れたセヌ - マリチーム県の都市である。ルーアンでは、木造 5 階建ての建築群が軒を連ねていた。北フランスのノルマンディー地方にあるこの都市の気候は、低温低湿であって、劣化・風化が起こりにくいこと、また地震などもないので、建造物がよく保存されていたようだ。ノートル・ダム大聖堂は、フランス・ゴシック建築を代表する荘厳な教会である。11 世紀に建設が始まり、何世紀にもわたって増・改築がなされた。19 世紀に完成した尖塔は高さ 151 メートルあり、フランスで最も高い。ノルマン人で初代ノルマンディー公になったロロの墓がある。【光の画家】といわれるモネの中期の連作『ルーアン大聖堂』はこの聖堂を主題としたものである。その壮麗さと内部の空間の広さは、目を見張るものがあった。午前中の訪れだったが、午後だったら、光の影響で、その趣も微妙に変わるものらしい。聖ジャンヌ・ダルク教会は、15 世紀の百年戦争でフランスの勝利に寄与したが、イギリス軍の捕虜となり、異端者として火刑に処されたジャンヌ・ダルクを祭って、旧市場広場に建てられた教会である。教会内部には、大きなステンドグラスがあった。

それにしても、わずか 10 代の少女が、如何に神の啓示を受けたとはいえ、滅亡寸前のフランスを救うきっかけとなるとは。信念と情熱が人を動かすものかと、感心した次第である。

平成 24 年 6 月 23 日

短歌：フランスの救国栄華祈りつつ火の中の乙女何を思わん

3) モン・サンミッシェル

モン・サンミッシェルは、イギリス海峡と大西洋に挟まれた北フランスのブルターニュ地方のフランス西海岸、サン・マロ湾上に浮かぶ小島に築かれた修道院であり、大天使ミカエルの 3 度のお告げを受けて、ノルマンディー大司教が築いたものらしい。モン・サン・ミッシェルは「聖ミカエルの山」の意で、旧約聖書にその名が記される大天使・ミカエルのフランス語読み由来するそうだ。北フランスの世界遺産の一つとして有名で、訪れる人も後を絶たない。今は、堤防でつながっているが、元々、最大干満差 15m 以上という。このため、湾の南東部に位置する修道院が築かれた岩でできた小島は、かつては満ち潮の時には海に浮かび、引き潮の時には自然に現れる陸橋で陸と繋がっていたそうだ。引き潮で沖合い 18km まで引いた潮が、猛烈な速度で押し寄せる。このためかつては多くの巡礼者が潮に飲まれて命を落としたといい、「モン・サン=ミッシェルに行くなら、遺書を置いて行け」という言い伝えがあったという。前日、フォーミュラーヴェールといいホテルに宿泊することになったが、夕方、モンサンミッシェルの遠景を眺めた。まさに奇巖城の趣で、よくこんなところに修道院が建てられたものだと、先人の情熱に敬意を表するとともに、その建設と日常生活も並大抵の苦勞でなかったろうとその苦勞に感じ入った。このような場所に教会を築くためには、島の岩盤を囲む基礎部分が必要であり、2 層に渡って建造物を設け、最上部の教会の層を支えるという 3 層構造になっているようだ。ために、修道院建築の主要部はゴシック様式だが、内部はさまざまな中世の建築方式が混ざり合って構成されているそうだ。教会堂は、フランク王国カロリング期の様式で、身廊はノルマン様式（11～12 世紀）、百年戦争後の 1421 年に破壊されたロマネスク様式の内陣はフランボワイアン・ゴシック様式（15 世紀半ば～16 世紀初頭）として再建された。これら周囲を 13 世紀の重層構造の修道院建築と 13～15 世紀の軍事施設が取り囲んでいる。ゴシッ

ク・リヴァイヴァル建築の鐘楼と尖塔は 1897 年に完成し、その上に奉られた剣と秤を持つ金のミカエル像は彫刻家エマニュエル・フレミエによって製作された。深層部からは、岩山の上に幾層にもわたり建造され続けた建築遺構も残るそう。急な坂道の上下りで、腰痛の持病のある我が身には、少々応えたが、名物のオムレツを昼食で頂くこともでき、来てみてほんとに良かったと思った次第である。

平成 24 年 6 月 24 日

短歌：回廊を散策しながら修道僧瞑想しつつ神思うかな

4) ロワール地方の古城(アンボワーズ城とシュノンソー城)

前日、トゥール ジロドーというホテルに宿泊し、ロワール地方に向かった。アンボワーズ城とシュノンソー城は、シュリー・シュル・ロワールとシャロンヌ間ロワール溪谷にある古城である。アンボワーズ城は、古代ローマ時代の砦を基にして、15 世紀の末に、シャルル 8 世が完成させたもので、シャルル 7 世、ルイ 11 世、シャルル 8 世、フランソワ 1 世らのバロア王朝の国王たちが過ごした。、フランソワ 1 世は、シャルル 8 世のあとを引き継いで、フランス・ルネッサンスを高めようとし、「モナ・リザ」の絵を抱えたレオナルド・ダ・ビンチを招聘した。彼は、フランソワ 1 世のために、この古城で 3 年を過ごし、様々な設備を設計した。1519 年にクルーで死去したが、彼の意志に従ってアンボワーズ城のサン・フロランタン教会堂に葬られている。「モナ・リザ」の絵自身は、現在パリのルーブル博物館にあるが、元々は、この古城に持参したようだ。フランソワ 1 世は、対外的には、イタリアやスペインとの戦争に敗れ、スペイン戦争で、自身カール 5 世の捕虜になるなど、失敗続きであったが、対内的には、貴族を制圧して、王権を高め、「フランス・ルネッサンスの父」と言われるように、文化的興隆に貢献した名君であったようだ。反面、新・旧教徒の対立の源になったというマイナスイメージもあるようだ。この古城には入らず、ロワール川の対岸から、遠景を眺めたただけだったが、十分にその歴史的な趣を感じ取ることができた。次いで、シュノンソー城の内部の部屋と庭園を鑑賞した。まず、この城を築くために、トマ・ボイエとその妻カトリーヌ・ブリソネが、マルク家の城塞と水車を壊し、塔の部分のみを残したそう。その前庭と塔を眺めつつ、壮大なシ

ユノンソー城の城門を抜けると、護衛兵の間に出る。ゴシック形式のこの部屋は、武装した宮廷の護衛が控えていた部屋で、この城の築城に貢献したトマ・ボイエとその妻カトリーヌ・ブリソネの紋章と「シュノンソー城が完成したならば、私の名は歴史に残る。」という意味の金言が見られる。並々ならぬ自負であったようだ。次いで、礼拝堂があり、やはり、祭壇の右手の石細工の祭器卓に、ボイエ家の金言が刻まれている。さらに行くと、当時の国王アンリ2世の愛妾であったディアヌ・ド・ポワティエの部屋と、皇后であり、未亡人となった、カトリーヌ・ド・メディシスが摂政として執務をとったという緑の書斎がある。その他、図書室、ギャラリー、厨房、フランソワ1世およびルイ14世のサロン、五人の王妃の居室などがあって、当時の王、后らの生活ぶりが偲ばれる。この城は、16世紀から歴代、女性が城主であったらしい。また、この城には、ディアヌ・ド・ポワティエの庭園とカトリーヌ・ド・メディシスの庭園と2つの大きな庭園がある。愛妾の庭園の方が、大きくて立派に見えるのは、考えて見ると、不思議な気がする。

平成24年6月24日

短歌：ロワールの古城を巡りてふと思う女の争い人の世の常

5) シャルトル・ノートルダム大聖堂

「フランスの穀倉」と言われるボーズ平野の中心にある古都シャルトルにあるロマネスク様式のこの大聖堂は、元々4世紀からの聖母マリア信仰の拠点となり、巡礼の地である。フランス最大の地下聖堂で有名である。たびたびの火事に見舞われ、13世紀初めに、ゴシック形式で再建された。マリア像のステンドグラスは、太陽の日差しを受けると、シャルトルブルー（ラピスラズリ）のステンドグラスを通して射し込む淡い青い光が室内に満ちて、幻想的な空間を作っているようだ。ゴシック・ロマネスクの混合建築は、ヨーロッパ最高の建築と称されるようだ。ちなみに、ラピスラズリ (lapis lazuli) は、和名では瑠璃（るり）といい、青金石（ラズライト）を主成分とし、同グループの方ソーダ石・藍方石・黝方石など複数の鉱物が加わった類質同像の固溶体の半貴石である。深い青色から藍色の宝石で、しばしば黄鉄鉱の粒を含んで夜空の様な輝きを持つ。エジプト、シュメール、バビロニアなどの古代から、宝石として、また顔料ウルトラマリンの原料として珍重されてきた。ラピスはラテン語で「石」(Lapis)、ラズリはペルシア語からアラビア語に入った "lazward" (ラズワルド: 天・空・青などの意でアジュ

ールの語源)が起源で「群青の空の色」を意味している。石言葉は「尊厳・崇高」などで、ステンドグラス用としては、最適であるようだ。

平成 24 年 6 月 24 日

俳句：ラピスラズリ青の光の大聖堂

6) ルーブル美術館

パリ市街の観光の一環として、ルーブル博物館を訪れた。30年前に訪れたときは、補修と改築中で、「モナ・リザ」の絵と、「サモトラケ島のニケ像」という彫刻を主に見たのを覚えている。今回は、フランス政府の肝いりで全面的な改築がなされ、ガラスのピラミッドなどもあって、様相を一新した新ルーブル美術館への訪れであった。あまりにも広い館内のすべての芸術品を鑑賞しようと思うと、一週間以上かかるのではないかと思った。ガイドの案内により、主な芸術作品を駆け足で回って鑑賞した程度であった。今回も、「モナ・リザ」の像を見たが、見物客のあまりの多さ故、ゆっくり見ている暇がないくらいであった。「ミロのビーナス」、「サモトラケ島のニケ像」は、今回も、その優美な姿態に、改めて、深い印象を持った。その他、ドラクロアの「民衆を率いる自由の女神」、ダビッドの「ナポレオン1世の戴冠式」などの絵は、その作者の大いなる構想とすばらしさに感じ入った次第である。

平成 24 年 6 月 25 日

俳句：ルーブルの美術の華麗さ麦の秋

7) オペラ座

オペラ座は、パリの中心エリアにあり、シャルル・ガルニエの設計による劇場であり、16世紀の古典様式とバロック様式からなる。ガルニエ宮とも言う。優美で豪華なその館内と観劇場

内の大空間と装飾は、熱気にあふれた観劇の様子を彷彿させる。今回、幸い上演の日ではなかったのですが、その雰囲気を見学することができた。天井には、シャガールの油絵でかくされているが、もともとは、ルヌブの天井画があつたらしい。この界限は、大きなホテルやギャラリー、ラファイエット・デパートなどの建築群が軒を連ね、日本料理店もいくつもあり、日本人観光客には、便利なエリアらしい。ただスリが多いので、気をつける必要があるようだ。

平成24年6月25日

俳句：オペラ座の観劇仕切るは怪人か

8) ノートルダム寺院

セーヌ川の中州のシテ島にあるノートルダム寺院を訪れた。聖母マリアの寺院という意味である。ゴシック建築を代表するローマ・カトリック教会の大聖堂である。月曜日であったが、結構見物客で賑わっていた。入場無料というのも、手頃に訪れることのできる世界遺産として人気があるようである。昔、ナポレオン1世の皇帝戴冠式が行われた場所であり、ヴィクトル・ユウゴの「ノートルダムのせむし男」の舞台ともなった。寺院内部は、バラ窓という美しいステンドグラスの広い空間が3つほどあり、その壮麗さは印象的であった。ステンドグラスには、キリストの一生が描かれている。また、入り口正面の「最後の審判」など、一連の見事な彫刻も印象的であった。

平成24年6月25日

俳句：陽光にまばゆく映えるノートルダム

9) サン・シャペル寺院

ノートルダム寺院の近くに、サン・シャペルの教会があり、そこを訪れた。「ゴシックの宝石」といわれ、後期ゴシック建築を代表する寺院である。ルイ9世の命で、キリストの聖遺物を安置するために、1248年に完成したという古い教会である。上階の礼拝堂は、旧・新約聖書の物語を描いた1,000個以上のステンドグラスに埋め尽くされ、これまでのどの寺院もの以上に美しかった。添乗員のすすめに応じて、訪れてつくづく良かったと思った次第である。

平成24年6月25日

俳句：壁面のまばゆい光の寺院かな

10) モンパルナスの高層タワー

ヴォーボワールなどの作家や芸術系有名人の墓が多いモンパルナス墓地の近くにモンパルナスの高層タワーがあり、パリ市街を眺望できる。最上階は、展望台とミニ・スナック

があり、夕方そこを訪れた。最近できたタワーであるが、パリ全体の概況を見渡すことができた。

平成24年6月25日

俳句：摩天楼眼下にきらめく夜のパリ

11) ヴェルサイユ宮殿

パリの西部のコンコルド・ラファイエットという現代風のホテルに宿泊して2日目の午前、ヴェルサイユを訪れ、ブルボン朝第3代フランス王ルイ14世の絶対王政時代のバロック建築の典型と言われるヴェルサイユ宮殿を見学した。新・旧の建築の見事な対照とも言える。その日は、あいにく雨であったが、壮麗な宮殿と庭園を十分に鑑賞できた。宮殿自体は、3階建てで、東側に入り口を持つコの字型の本殿の左右に2つの翼棟が繋がった構造をしている。1、2階部分分が、“美術館”として、一般的に公開されている。王室礼拝堂や大居室、王妃の部屋、アポロ

ンの部屋、ヴィーナスの部屋など、700近い部屋がある。その中で、鏡の間は、庭園に面する17の窓と、それに正対する壁に同じ数の鏡が並び、窓から入り込む光が反射するように設計されているようだ。天井には、ルイ14世の功績を示す絵画や、王家の紋章であるユリの花の装飾がある。諸外国の元首や特使との謁見や舞踏会の会場となり、以降ヨーロッパ各国の宮殿建築の模範となったのである。ヴェルサイユは、30年ぐらい前に、国際会議が開催され、旧建設省建築研究所時代の同僚の一人と一緒に訪れたこともあったが、そのときとはまた別の新たな印象を持った。庭園もすばらしいものであったが、日本の、自然と融合する様式と異なり、人工の装飾美を強調し、自然を威圧する様式のような。元々、ヴェルサイユ宮殿のモデルとなったのは、パリの南東にあるルイ14世の財務卿ニコラ・フーケの居城ヴォール・ヴィコンテ城である。20年前、「物質・エネルギー同時移動に関する日仏共同研究」のために、パリに10日間滞在したことがあったが、そのとき、この古城を訪れたことがあった。少し鄙びていたが、城の骨格と庭園および内部の装飾・家具・調度類など、目を見張るすばらしいものがあった印象が残っている。この城のすばらしさに嫉妬したルイ14世が、建築家ル・ヴォー、庭園技師ル・ノートルをスタッフとして、新たに、王家の勢威を示す意味も兼ねて作ったのが、ヴェルサイユ宮殿であるという。いずれにせよ、華美と豪勢の限りを尽くしたフランスのブルボン朝の王家と貴族の生活と社交のための宮殿であったようだ。

平成24年6月26日

俳句：ヴェルサイユ雨に震える館かな

俳句：ヴェルサイユ華美と豪奢の館かな

12) オルセー美術館

およそ30年ぶりにこのオルセー美術館を訪れた。マネ、モネ、セザンヌ、ルノワール、などのフランスの印象派や、ゴッホ、ゴーギャンなどの後期印象派の画家の多数の作品が展示されていた。この建物は、もともとは、1900年のパリの万国博覧会に合わせて、オルレアン鉄道によって建設されたオルセー駅の鉄道駅舎兼ホテルであった。設計者はヴィクトール・ラルーである。取り壊しの話もあったが、19世紀美術を展示する美術館として生まれ変わったものである。美術館の中央ホールは地下ホームの吹き抜け構造をそのまま活用している。建物内部に

は鉄道駅であった面影が随所に残っている。オルセー美術館は、前述の印象派や後期印象派などの、19世紀末パリの前衛芸術のコレクションが世界的に有名だが、19世紀の主流派美術で後に忘却されたアカデミズム絵画（アール・ボンピエ）を多数収蔵・展覧し、その再評価に繋げていることも、この美術館の重要な活動の側面であるようだ。鑑賞した主な絵画は、アングルの「泉」、カバネルの「ヴィーナスの誕生」、マネの「草上の昼食」、ドガの「踊りの花形」、ルノアールの「ムーラン・ド・ギャレット」、セザンヌの「台所のテーブル」、ゴッホの「ひまわり」と「自画像」、ゴーギャンの「タヒチの女達」である。審美眼のある人ならば、それぞれの絵の特色と価値がよくわかるのかもしれない。しかし、凡人の私は、すべて立派に見えて、甲乙などつけ難しの印象を持った。ただ、フランスの「古き良き時代」の美術の流れは、少しは、理解できたと思われる。

平成 24 年 6 月 26 日

俳句：名絵画半日過ごす美術館

1 3) シャンゼリゼ通りの建築群

コンコルド広場から凱旋門にかけてのシャンゼリゼ大通りを歩いてみた。マロニエとプラタナスの街路樹が整然と並び、西側には、カフェ、レストラン、映画館、アーケードなどが並ぶパリ西北部の繁華街であり、世界でもっとも美しい通りと称されるのも、あながち誇張ではないと思われた。余談になるが、トイレの借用に立ち寄ったビルは、電気自動車の陳列を業務としていた。凱旋門には上らなかったが、ロワール広場で、凱旋門を背景に、写真を撮った。

平成 24 年 6 月 26 日

俳句：シャンゼリゼ夏の緑の木立かな

1 4) セーネ河畔の建築・彫刻群

バトームッシュという船会社のアルマ橋発着の「セーヌ川ディナー・クルーズ」を満喫した。夜のイルミネーションに彩られて、いくつかの橋を越えながら、1時間ぐらい、豪華客船のディナーを味わった。途中、セーヌ河畔の建築群と自由の女神像、エッフェル塔を眺望できた。

平成 24 年 6 月 26 日

俳句：セーヌ川光に浮かぶ建築群

以上が、フランスの建築等の世界遺産巡りの旅の際、書き連ねた見聞録である。

お金と名誉と生涯

多くの人は、生きる上で、生活水準の向上を求めて、ある程度のお金が欲しいだろうし、世の中での尊敬と生きる充実感を求めて、社会的地位や名誉を求める。これは、ある程度、至極当然だろうと思われる。「仰げば尊し」という卒業唱歌の中にも謳われているように、「身を立て名をあげる」というのは、戦前・戦後を通じて、これまでの教育目標の一環であり、社会的目標でもあったように思われる。けれども、ここきて、これらの生き方は、果たして、人間に幸せと心の安らぎをもたらしたのか、少々疑念を感じざるを得ない。

最近でも、事業に成功し、あるいはマネーゲームにより、大金持ちになり、名をはせた人は多い。実名を挙げるのは、はばかれるが、スーパーマーケットのオーナー、鉄道を主とする不動産業の社長、情報産業による時代の寵児となった青年実業家、マネーゲームのための投資ファンドのオルガナイザー、政権交代の立役者となり、得意満面のとある政治家達など、時代の流れに乗じて一大財を作り、世俗的栄達を遂げた人達は、ちょっと考えても、枚挙にいとまがない。けれど、これらの人たちが、生涯その金の栄光を持ち得たわけではないのが、マスコミ等で報じられるとおりである。また、「立身出世」により人身位を極め、世俗的栄達を遂げた人

も、古今東西、王侯、貴族、政治家など、生涯その栄光を全うできた人は少ないようだ。逆に、ゴッホさんのように、生前不遇のまま生涯を終え、死後にその業績の評価がうなぎのぼりに高まり、名声を博する場合もある。もっとも、ゴッホさん自身は、亡くなっているから、自分が有名になっていることは知るよしもないだろうが。中国史、西アジア・中央アジア史や、ヨーロッパ史を賑わすように、英雄が一代で築いた大帝国も、三代目で滅びた例は、世界史上多い。人生には、大波小波に見舞われ、直線的な平坦なコースばかりではないことが多い。迂回する道の方が早く目的地に着くことだってある。お金と名誉と安楽な生涯は、必ずしも、全うできる人は少ないように思われる。そうすると、太く短くではなく、ある程度、細く長く、自分の生きたい生き方を全うできる人の方が、幸せなのかもしれない。才能があり、最後まで、充実ある人生を生き抜ける人は幸せだろう。学者・研究者、芸術家、作家、俳優などの生き様の評価もっとあってしかるべきではないかと考える。昨今、陰惨ないじめ問題など、教育のあり方の見直しも問われる中で、やたらと知識を植え付けるのではなく、もう少し、生徒の個性と多様な生き方を重んじるような教育であるべきなのではないだろうか。自ら考えて問題を見つけ、それを解決する能力を養わせること、自ら考えて、本物と偽物を見抜く眼力・判断力を身につけさせるのが、真の教育ではないかとふと考える次第である。

平成 24 年 7 月 10 日

短歌：天の川喜び悲しみ数あれど天寿を願う人の道かな

墓と家紋と家系

3年ぶりに富山県の黒部と入善を訪れ、黒部の実家の福島家および親族の墓、および入善の家内の実家である上田家とその親族の墓参りをした。昔は、墓土の上にくっつかの天然の小さな墓石を並べた簡素なものも多く、お盆前の草むしりも大変だったことを覚えている。最近では、ほとんどが花崗岩等の磨き石でできた墓石の墓で、正面は、〇〇家先祖代々の墓という印字と家紋が刻まれており、側面に、建立の年と建立者の名が記載されているようだ。ちなみに、福島家の家紋は、丸に立ち沢瀉（おもだか）、上田家の家紋は、細中陰鶯のようだ。他方、故人の骨納めの儀を除き、墓の内部の骨壺の状況を知る機会は、めったにない。3月、長

兄の骨納めの儀に参列できなかったために、今回確認してみた。両親と祖母および幼少でなくなった長女の骨壺とともに、江戸時代の寛永年間にまでさかのぼるいくつかのものも確認できた。昨年作った福島家の家系図と照らし合わせると、その関係がある程度わかる。昨今、人の絆の重要性が見直される中で、墓と家紋と家系図についても知っておくのも良いことだろうと思われる。

平成24年8月11日

俳句：今に知るおもだかという家紋かな

夏の風物

8月の盛夏の季節となった。今年も猛暑に近い日々が続いている。昔から夏の風物と言われるものは、いろいろある。まずは、夏の暑さを忘れ、涼風を楽しむ風鈴である。風鈴は、南部鉄でできていたと思われる。軒先に取り付けられて、風に応じて、風流な音を楽しませてくれたことが、懐かしく思い出される。最近では、空調設備が普及したせい、とんと一般の住宅の軒先を飾ることがなくなったのは、少し寂しい気がする。機能性の追求ばかりでなく、自然と融合した風流としての日本伝統の夏の風物として、もう一回復活を願いたいものである。そういえば、松尾芭蕉が、「静かさや岩にしみいる蟬の声」と謳ったように、蟬の鳴き声も夏の風物である。しかし、この乙戸南の住宅界隈では、それほど蟬の声が聞こえない。10年間滞在した北九州の教員宿舎では、裏山があったせい、うるさいほど蟬の声が聞こえたのに。乙戸南公園まで行けば、少しは聞こえるようだ。通常、蟬の声も、最初は、アブラゼミ、次いでニイニゼミ、夏の終わりはツクツクボウシというように、移り変わりがある。北九州では、ヒグラシやクマゼミの声もあったようだ。今日、アブラゼミの死骸を家の玄関先でみつけた。話によると、アブラゼミは、9年近く地中で過ごし、夏の一週間の短い時間を精一杯鳴き暮らして生涯を終えるそうである。たかが蟬と言うなかれ、精一杯生きたことを称えたい気がする。もう一つの夏の風物はトンボである。昔は、オニヤンマ、ギンヤンマが住宅地の界隈を往来し、川縁や池の端では、シオカラトンボもよく見かけた。ここではほとんど見かけなくなってしまった。蜻蛉もほとんどみかけない。まして、夏を彩る蛍の光など望むべくもない。九州

では、遠賀川の支流で蛍が乱舞する場所もあったように記憶している。生物の生息のための基盤が失われたせいだと思われるが、少し寂しい気もする。その反面少し驚きをもって見ることもある。サルスベリの木は、近くの民家などで栽植されているのをよく見かけるが、約1ヶ月以上夏から秋の初めまでずっと薄い紅色の花が咲き続けるようだ。そのために百日紅という異名がある。夏の多くの生物のはかなさと比較すると、驚くほど長命のようだ。生物の寿命は、どのように決まっているのだろうかと考える次第である。

平成12年8月15日

短歌：限りある命の限り生き抜いてあなかしこ土に帰るは大往生かな

燕と雀(その2)

8月から9月に月が変わった。夏から秋への季節の変わりである。それとともに、燕がいなくなり、雀が頻繁に飛び交うようになった。稲穂がたわわに実をつけた水田や電線で、雀が群をなしている。燕も雀も住宅地でよく見かける鳥であるが、活動の時期の交代があるようだ。5月から8月までは、燕の独擅場であった。水田でも電線でも、見かけるのは燕ばかり。8月半ば頃、近くのコンビニエンスストアの監視カメラの上に燕が作った巣には、雛を三羽見かけた。どうやら子育てを終え、南の方面に戻っていったようだ。それとともに雀の活動が目立つようになった。燕が渡り鳥、雀は留鳥であることを改めて、実感する次第である。

平成24年9月5日

俳句：燕去り雀の天下稲穂かな

。

元素の周期律表と資源循環

ものを成り立たせているもとの性質をもつおもとの単位が元素である。周期律表は、すべての元素が一定の規則により整然と並べられた表であり、多くの元素が周期的に同じような化学的特性を示す。また、化学的特性の多くは、各元素の原子の内部電子構造の最外殻の電子配置を反映するものであることが今日一般的に認められている。“すべての物質は、土、空気、火、水の4元素からなる”という4元素説にみられるギリシアの自然哲学者らの想念的な考察とは異なり、具体的かつ実証的にひとつひとつ元素が発見されていく歴史は、科学技術発展の歴史と軌を一にする。その歴史の中で、元素の性質には何らかの規則性があるのではないかという考えに基づいて、メンデレーエフ (MENDELEEV, D. I.) の周期律表の発見を生んだ。今度は、その周期律表を基に、天然のものも人工のものも含めて、多くの新しい元素が発見された。2003年では、人工元素を含めて、118の元素があることが知られていた。2010年2月ドイツの重イオン研究所で112番目の新元素が発見され、コペルニシウム (Cn) と命名された：日本化学会メール通信 2010年2月25日)。2018年には、日本の理化学研究所で、113番元素が発見され、ニホニウムと命名された。第7周期までの元素がすべて発見されたことになる。メンデレーエフが、当時、周期律表のまだ発見されていない部分をあけておき、今後発見される元素の性質を予見し、その後、新たに発見された元素が、その通りの性質を持っていたという。メンデレーエフの達見と先見性は、大したものだったと思われる。化石資源、鉱物資源、生物資源、水資源あるいは大気資源など、多くの資源は、この元素の組み合わせから成り立っており、地球上に豊富に存在する元素から成り立っている資源や、例えば豊富ではなくても循環性に優れた資源は、枯渇するまでに時間がかかり、安定供給性に優れたものと考えることができる。たとえば、建築分野での基幹構造材料の一つである鉄鋼は、一番安定した元素である鉄 (Fe) を主体とし、炭素 (C) が存在することで、その硬さの源になるが、各種の稀有金属元素 (銅 (Cu)、クロム (Cr)、ニッケル (Ni)、モリブデン (Mo) など) を合金元素として含む。水和したコンクリートは、ケイ素 (Si)、カルシウム (Ca)、アルミニウム (Al)、酸素 (O)、水素 (H) から成り立ち、木は、炭素 (C)、水素 (H)、酸素 (O) から成り立つ。また、動・植物の死骸が炭化した石油・石炭の化石資源は、硫黄 (S) を一部不純物として含むものの、炭素 (C) と水素 (H) からなる炭化水素 (-(CH)_n-) である。我々は、生きていく限り、地球 (あるいは宇宙からも) の資源とエネルギーを消費しながら生活する。また、我々の人体そ

のものも、その主要な元素組成は、宇宙および海の組成と類似している。そういう状況を考えるとき、元素の周期律表と数十億年以上の気の遠くなる様な過程を経て形成された地球の元素組成とそれに関わる資源の状況に思いをはせてみるのも、重要であるし、また、必要でもないかと考えられる。

平成 24 年 11 月 5 日初稿

平成 31 年 11 月 25 日脱稿

短歌：周期律宇宙の元素顧みて資源生命その由来を知らん

筑波山

近くのコンビニエンス・ストアの正面に、紫峰（しほう）と呼ばれる筑波山がくっきり見える。西側の男体山と東側の女体山が、双方の峰としてみえる。実際には、女体山の方が若干高いはずだが、ここからは、同じぐらいの高さに見えるようだ。筑波山は、北関東の霊峰として、古来いろいろな人の来訪を招き、筑波山神社は、今も、年始の礼拝の対象となっている。「つくばねの峰より流れる男女ノ川恋ぞ積もりて淵となりぬる」という百人一首の歌がある。男女ノ川は、女体山と男体山の峰から流れる川で、桜川に合流して、土浦の霞ヶ浦に注いでいる。富士山と対比して「西の富士、東の筑波」と称される。富士山が、成層火山としてのその美しい姿で人々を魅了し続けてきたが、時々、大噴火で災禍ももたらし、自然の猛威も知らしめる山だった。筑波山は、北関東の霊峰として、自然災害の例も少なく、山岳信仰の対象となってきたようだ。

平成 25 年 1 月 5 日(土)

俳句：つくばねの霊峰仰ぐ冬景色

からたちの花

「からたちの花」(からたちのはな)は、北原白秋作詞、山田耕筰作曲の日本の童謡である。文部省唱歌でもある。2007年(平成19年)に日本の歌百選に選出されている。山田耕筰と北原白秋は、1922年(大正11年)に雑誌『詩と音楽』を創刊する。「からたちの花が咲いたよ 白い白い花が咲いたよ からたちのとげはいたいよ 青い青い針のとげだよ からたちは畑(はた)の垣根よ いつもいつもとおる道だよ からたちも秋はみのるよ まろいまろい 金のたまだよ からたちのそばで泣いたよ みんなみんなやさしかったよ」。その後、故島倉千代子さんが、からたちの花に関して、「からたち日記」、「からたちの小径」を歌にしているようだ。

平成25年1月24日

男のロマンとテロリズム

平成25年1月28日

水戸の名所と博物館・美術館巡り

およそ約20年ぶりに、水戸の偕楽園を訪れた。幸い天気は快晴で、梅祭りの最中ということで、賑わいをみせていた。JRの企画で、臨時に偕楽園駅への臨時停車を設定し、アクセスの容易性も功を奏していたと思える。久しぶりに訪れた偕楽園は、梅の名所で、紅梅・白梅入り乱れて咲き乱れていた。ただ、菅原道真さんが、「東風吹かば匂い起こせよ梅の花主無しとて春をな忘れそ」と歌ったのと違い、梅の匂いは、いまひとつだった。偕楽園の一角に、徳川斉昭侯が築いた好文亭がある(好文は、梅の異名らしい。中国の晋(しん)の武帝の故事「文を好めば則ち梅開き、学を廃すれば則ち梅開かず」により、梅の異名を「好文木(こうぶんぼく)」といったことから命名されたようだ)。一昨年の東日本大震災の時、壁が崩れるような被害があ

ったが、復旧されて、再度開亭されたようだ。木造三階建ての学舎である楽寿楼（らくじゅうろう）と徳川の婦人や女官らのくつろぎの場である平屋の奥御殿が連結した形になっている。楽寿楼の三階からは、千波湖や梅林が眺望できてすばらしかった。

その後、徳川記念博物館を訪れた。水戸徳川家の系図やゆかりの品々が陳列されており、歴史を学び、楽しんだ。

また、少し離れた水戸市内に、水戸近代美術館があり、岡倉天心、横山大観らの日本画家らの作品を楽しんだ。特に、横山大観の「生々流転」の絹本水墨画は、圧巻だった。分野は違うが、先人の情熱と偉大な業績に感じ入った次第である。

平成 25 年 2 月 22 日

俳句：梅開く薄桃色の花卉かな

梅と桃と桜

今年は、一昨年、昨年に続いて、寒い日が2月から3月上旬まで続いたが、その後ぽかぽか陽気もあって、3月中旬からは、梅、桃、桜が、相次いで開花した。桜に至っては、例年より1週間ぐらい速い開花となり、久しぶりに春の花見を楽しんだところも多かったようだ。ところで、これらなの花が開花するには、一定期間低温に置かれ必要があり、その後の温度上昇により、春を感じ取って、咲き出すらしい。開花のための生命プログラムがあるということだ。考えて見ると、生物には、生き抜くためのそのようなプログラムがあるらしい。遺伝子の中に組み込まれているのか、不思議な気がする。

平成 25 年 3 月 25 日

燕の再来

燕が、南から渡ってきたらしい。今年は、春は名のみで、殊更に寒い日々が続いていたが、昨年より1ヶ月ぐらい速い再来である。相変わらず、近くのコンビニエンス・ストアの軒先の監視灯の上に巣を作ったらしい。雌雄の燕のつがいが、雛燕に、交互に餌をはこんでいるのが見られるようになった。人間界の諸事の異変や天変地異に関わらず、生来の本能を続けているというのは驚きである。燕よ、地球に生息した愛らしい鳥として、末長く生物種を続けて欲しいと思う次第である。

平成 25 年 4 月 5 日

俳句：渡り鳥今年も元気燕かな

生涯設計と寿命

自分で言い出したのだが、生涯設計という考え方がある。最近では「人と環境に優しい」環境調和型生涯設計に変わりつつある。もともと、建築材料・部材を媒介にして、要求される性能/機能を満足させながらも、環境に配慮しながら、生産、輸送、組立/建設、使用/維持・保全、解体、廃棄、リサイクルなどのライフサイクルでの環境負荷を低減する考え方だった。

しかし、いろいろな材料・部材、部品、製品、建造物の設計行為において、ライフサイクルでのコストや環境負荷を最小にして、最大の性能及びサービスを得るという考え方として、諸分野に浸透することになった。また、これまで、材料・部材・建造物の寿命評価・予測の話もやってきた。寿命にも、材料・部材の寿命ばかりでなく、人間、動・植物、地球、宇宙に関するものもあるが、気象予知、地震予知、火山噴火の予知などとともに、いかに寿命予測が難しいかが実感である。しかし、有限の寿命の中で、いかにして、人としての生き方を考え、実行するかをプログラムするのが、生涯設計である。

平成 25 年 4 月 28 日

才能と生命力

人の才能と生命力との関係は、考えてみると、不思議な気がする。たとえば、音楽家等で、幼い頃に、神童の名をほしいままにし、素晴らしい才能を発揮した人が、生命力にも恵まれて、長寿命で、晩年までその才能を持ち続け、創造的であっただろうか

2016年4月27日

遠い人間の祖先から、色々な天変地異に悩ませられながらも、たくましく生き抜いた人類、動・植物の知恵を見直してみるのもいいかも。

花鳥風月の情報を提供します。

今、土筆もたんぽぽも終わって、橙色のヒナゲシと青色の矢車草が、咲き乱れています。近くの沼地には、白鷺が飛んでくるようになりました。生命のたくましさを考えることしきり。自分も、命の続く限り、体が続く限り、頭の働く限り、研究活動等と哲学等が続けたいと思います。宜しく。

秋の味覚

秋の味覚というと、色々なものがある。まず、秋の魚で思い浮かべるのは、秋刀魚である。昔から、秋の味覚の中で、第一に唱えられていた大衆魚である。近年は、生息領域が変わったのか、乱獲がたたったのか、中国、台湾、韓国など、今まで食することもなかった近隣の他の諸国も秋刀魚の味に目覚めて漁獲するようになったためか、日本市場に回る秋刀魚の量は、かなり減っているようだ。それでも、秋刀魚が一番だ。

次いで、果物としては柿である。柿も、富有柿などの甘柿の他に、富士柿のような渋柿、あるいは、焼酎などを使って渋を抜いた合わせ柿もあり、結構、その種類も多いようだ。「柿食えば、鐘が鳴るなる法隆寺」と正岡子規が謳ったが、御所柿という奈良県（御所）（ごぜ）市原産の完全甘柿だったらしい。

秋のきのこととしては、古来、松茸が珍重される。見た目と香りは、松茸が一番だが、本当は、味は、「しめじ」が一番らしい。人間の5感のうちの視覚および嗅覚と味覚の違いかな。松茸も、取れにくくて、高価になり、滅多に味わうことができなくなってきたのは、少しさみしい感がする。他方、秋の野山の収穫の果物として、栗もあるが、「あけび」も、結構味が良いようである。

◎令和元年9月15日

俳句：松茸の匂いなつかし秋の暮れ

花鳥風月と星・虹

最近、改めて、花鳥風月と星・虹を愛でる感受性を持ち続ける感性の大切さを感慨深く考える。松尾芭蕉翁が、「ついに無能・無才にて、この道一筋に通ずる」という思いとともに、風雅の世界に生き、「正風俳句」の創成と振興とに生涯を捧げたというのは、分野は違っても、人の生き方として、相通じるものもあるように考えられる。人生は、直線的な平坦コースばかりでなく、でこぼこで、ぬかるみ、泥んこに見舞われ、生きているのも嫌気がするコースであることも多い。それでも、花鳥風月を愛で、生きている回りの環境、季節の移り代わり、あるいは、遠い宇宙に思いを巡らすのも悪くはない。人としての気持ちの余裕を失わないで、天命を全うする術を考えるのも、大切かもしれない。

令和元年11月5日

俳句：ムスカリの青い花も野辺の中

自然災害と物質文明

寺田寅彦博士が、【天災は、忘れたところにやってくる】という名言を、その随筆で述べておられる。最近頻発している想定外の天変地異を考えると、これまで考えたこともない時・場所・規模で起こることも多くなってくると考えられる。怖いものとして、「地震、雷、火事、おやじ」と並び称されてきた。しかし、最近、風水害や、竜巻なども、想定する必要がある、日本は、自然災害とつきあっていく必要があることを思い知る次第である。また、2011年3月11日に発生した東日本大震災を契機として、自然の恵みと猛威が認識される中で、我々が享受してきた科学技術とそれに基づく欧米型の大量生産・大量消費・大量廃棄型物質文明の大きな見直しが必要になっている。東日本大震災や南紀・伊豆大島の台風被害および2016年4月14～16日の熊本・大分大地震、想定外の台風10号による東北・北海道の風・水害、2018年の大阪北部地震、西日本の豪雨・酷暑、台風21号による想定外の風・水害、想定外の北海道胆振（いぶり）東部地震、2019年の夏の酷暑と大雨、台風15号及び19号による風・水害、洪水、土砂災害など、最近の想定外の天変地異等の自然災害への対応が緊急性を増している。しかし、長期的視野に立つとき、持続可能性と関連した環境調和性の評価と技術開発も必要かつ不可欠と考えられる。人類の長年の諸活動の結果、地球規模での浄化能力・自浄能力を超えた固体・液体・気体廃棄物の大量発生の事態を、抜本的に解決する方策を考え、持続可能な道を模索する英知が問われている。

◎令和元年11月22日脱稿

俳句：桜咲く復興ソングを唄いつつ

2020年1月2日

腰痛・肩痛とリハビリテーション

晩年になると、手・足・肩・腰などにいろいろな不具合が生じる。

2020年1月2日

星と虹

2020年1月2日

星と虹は、人に、どのような思いを抱かせるだろうか

遺言と生涯

2020年1月4日

終活時、遺言をまとめるとき、人生を振り返り、人は、どのような思いを抱くのだろうか？ 順風満帆で、人もうらやむ才能と運に恵まれ、世俗的栄達と金銭的余裕を得た人たちは、生前のおどましく、思い出したくもない悪行を悔いることもなく、満足して、大往生を遂げるのだろうか？ また、大波小波に揺れ揺られ、何度も失敗と挫折と愚行を繰り返しながらも、たくましく生き抜いた人たちは、果たして、自分の描いた夢や希望を果たせないで、失意をの念を抱きながら、この世を去るのだろうか？ 人生は、勝ち負けといううことはなく、自分で精一杯生き、それなりに、生命力と良き伴侶や子宝に恵まれて、小市民的生活を全うできた人達は、この世に未練もなく、天国に行くことを願って、生を終えるのだろうか？

細菌等と伝染病

新型コロナ肺炎ウイルス感染の世界的拡大が、自然災害とは別の意味で、人類の存続に対する脅威となっているようだ。もともと、中国の湖北省武漢市で、コウモリが媒介となった新しいウイルスが人に感染したのが始まりとされるが、人から人への感染で、急速に拡大した。これまでにない新たなウイルスで、37.5℃を越える発熱とせきと呼吸困難を伴うとされる。対応する治療法も見つからないまま拡大し、死者も出るようになった。世界各国で、感染拡大防止のための人の集まりと移動制限措置に関する緊急事態宣言および非常事態宣言も出された。人類の英知を結集して、実効的な対応策に基づいて、収束し、沈静化することが、期待される。

歴史を紐解いて見ると、細菌等による伝染病と人類の戦いは、数多い。古くは、中世のヨーロッパで、ネズミを媒介とするペスト菌の伝染で、人口の3分の1が、亡くなったとされる。また、インカ帝国が滅亡したのは、スペイン人が持ち込んだ天然痘の感染拡大だったとされる。近世・現代では、第一次世界大戦の時のスペイン風邪の伝染拡大がある。コレラ菌など、光学顕微鏡で見つかる通常の細菌と違い、ウイルスは、更に小さく、通常は目に見えない。このウイルスは、新たに、人類の存続に警鐘を鳴らしている。早めに沈静化を願いたい。

令和2年3月21日

2020年3月6日

2020年3月9日

芸術と科学技術

芸術と科学技術の融合化の動きが盛んである。

2020年3月23日

可視化の話

最近、情報の公開といろいろな現象の「分かり易く見えるようにする」（可視化）の動きが盛んである。難しく、いくら懇切丁寧な説明を受けても、理解しがたいことも、世の中には多い。

花鳥風月

令和2年年4月25日

火災と防・耐火

令和2年年4月26日

F A C E B o o k の timeline の記載から

青春時代に作って、頭にしまい込んでいたが、晩年になり、ふと思い出して、文章にまとめ直した詩3篇：

・わが故郷黒部を称える詩一篇：

【望郷】

南方に立山連峰の雄姿を仰ぎ、北方に佐渡に連なる日本海の荒海を望む。

流れ下るは、天下の暴れ竜黒部川。

遠く十字峡に源を発し、溢れる奔流となり、峡谷を走り抜ける。

その支流48ヶ瀬となり、豊かなる黒部扇状地を形成せり。

春は、桜木わが世を唄い、近隣の丘陵花一色となる。

夏は、荒海鏡のごとく澄み渡り、遠く能登半島を眺望する。

秋は、紅葉一色となり、あまたの海の幸、山の幸が、宴席を賑わす。

冬は、あたり一面銀世界となり、北国の太陽、人の心を幻惑する。

黒部は、これ山紫水明の地、いかで蕉翁この地を唄わざるか。

・大宰府の遺跡を眺めながら思いを述べた詩一篇：

【追想】

水城北郭に横たわり、清川筑紫野を廻る。

深草の中、いずれの地かこれなる。

大宰府は要害の地、かつての隆盛誰か知らん。

日暮れて、冷氣山道を廻るとき、

官公への思い、人をして憂えせしめるなり。

・博士論文の序文の中で書いた学問と葛藤に関する詩一篇：

【寒月】

寒月煌煌として夜空を照らし、万物深き眠りに落ちる。

清澄なること、これ湖水を見るがごとく、

静穏なること、これ深山に踏み入るがごとし。

一人草舎に座して天倫を論じ、寒風吹き抜ける山徑に思いを巡らす。

慄然として天空を仰げば、

寒月いよいよ青みを増し、正に、わが心に相和するがごとし。

F A C E B o o k の timeline の記載；

2016年4月27日

遠い人間の祖先から、色々な天変地異に悩ませられながらも、たくましく生き抜いた人類、動・植物の知恵を見直してみるのもいいかも。

花鳥風月の情報を提供します。

今、土筆もたんぽぽも終わって、橙色のヒナゲシと青色の矢車草が、咲き乱れています。近くの沼地には、白鷺が飛んでくるようになりました。生命のたくましさを考えることしきり。自分も、命の続く限り、体が続く限り、頭の働く限り、研究活動等と哲学等が続けたいと思います。宜しく。

平成 28 年 12 月 22 日

2016 年 1 2 月 2 2 日

今度は、糸魚川市の都市火災のようですね。小さい頃、自分の家と小学校校舎が、火事で焼失し、隣の魚津市も、大部分が焼失してしまったことを悲しく思い出します。ですが、それにめげずに、生き抜いた竹馬の友、同級生等を、懐かしく思い出します。建築も、災害の防止ということも忘れないでください。ですが、地球環境問題への対応も重要だと思います。夢と希望を持って、やりたいものです。皆さま、元気にやりましょう。

2019年（平成31年および令和元年）12月27日:Facebook への記載原稿（予定）

（2019年を振り返って）（その1）

平成31年から令和元年に年号が変わり、新しい時代の始まりを感じさせることもありました。今年も、喜怒哀楽いろいろなことがありました。

先ず、地震、火事、風・水害、停電、土砂災害などの想定外の天変地異の自然災害・人災が、多発しました。亡くなられた方々の心からのご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様のお見舞いと、一日も早い復旧・復興をお祈り申し上げます。

他方、外では、民族的紛争、宗教的争い、内戦・テロ、世界の覇権をめぐる争い、内では、いろいろな殺りく事件、学校・家庭・会社内等でのいじめ問題、政治的な黒い霧および不透明問題、企業等のイメージを損なうデータの漏洩・消失問題、芸能界・スポーツ界等でのセクハラ・パワハラおよび薬物事件、科学技術等の信頼性を喪失させる研究不正

事件など、悲しく、暗い話もありました。昭和・平成時代を支えた名人・偉人・面白人が、長い二度と帰らぬ旅路に赴きました。また、長年親しみ、世話にもなった先輩、知人、友人、後輩、世界的に有名な偉人に近い人等の訃報も続出し、悲しみに、襲われることもありました。温暖化の是非と対策をめぐる問題、大気・水質・土壌汚染、廃棄物問題、野生生物の激減と有害生物の広域移動など、人類の長年の諸活動による地球的な規模での問題が、人類ばかりでなく、生物全体の存続をも危うくする危険性も認識されるようになりました。可能な限り、的確な防災・減災対策や実効的な対応策を考える英知が必要であることが認識させられました。また、改めて、頂いた命を大切に、天命を全うすることの重要性も、考えさせられました。

ですが、象徴天皇・皇后の速やかな交代、文化界・スポーツ界でのいろいろな快挙、科学界でのすばらしい発見や創造、実業界での新しいイノベーション（人工知能、ビッグデータ、ロボット、IoT、可視化など）により、今後に向けての明るい話題もありました。オリンピック・パラリンピックの開催が近づく中で、欧米文化もすばらしいけど、花鳥風月やわび・さび等に関する感受性等に根差す、日本文化のすばらしさも見直されるようになりました。人と生

物と自然との共存・共栄と宇宙船地球号の大切さ、世界遺産の保存と存続と世代的継承、地域・地方社会の再生と活性化に向けての動きなど、夢と希望と情熱と感性と努力と継続を感じさせる話も結構多かったと思います。

私自身は、ぶり返す腰痛・肩痛や新たに見舞われた動脈硬化や神経性障害による足・手の痛みや機能低下などの体の不具合に悩まされながらも、リハビリテーションに励みました。血行不良等による右足の不具合による歩行困難で、車いす対応での活動を余儀なくされながらも、花鳥風月を愛でながら、研究活動を続け、いろいろな人々に助けられて、予定していた3つの学会（マテリアルライフ学会、日本建築学会、日本建築仕上学会）での研究発表を無事終えることもできました。受賞（マテリアルライフ学会 30 周年功労賞）とともに、無事3つの研究発表を終えられたことは、大きな喜びとなりました。

今年も、後10日余りを残すだけですが、良い年末を祈願するとともに、今年の皆様のご厚情に感謝したいと思います。

（2019 年を振り返って）（その2）

激動の2019年も、まもなく、終わろうとしています。

忘れていたかも知れませんが、劣化と寿命について、考えさせられることも、多かったようです。

材料・部材等の劣化は、外部環境等による性能・機能の変化として、社会的インフラや建築物の損傷やその資産価値の低下や不測の事故、および世界遺産の存続にも影響を与え、寿命を早めることもわかってきました。また、自然災害や人災の際の危険度を高めることにもなります。気候・風土の影響もありますが、地球環境の変化も、紫外線や二酸化炭素等による劣化や風・水害等の自然災害の増大にも連なることもあるようです。長期的な実効的な対応策とともに、短期的・中期的な防災・減災対策を考えることも、重要なようです。寿命にも、材料・部材の寿命、動・植物の寿命、人間の寿命、人工建造物の寿命、文明の利器や製品の寿命、地球

の寿命、宇宙の寿命など、いろいろあるようです。劣化現象がどのように起こるか、メカニズムの研究例は、多いけれども、それをわかり易く“見える”ようにする（「可視化」）とともに、寿命と結びつける話は、世界中でも誰も考えなかったようです。最近、ようやくその意味が理解されるようになってきたらしい。気象や地震や火山の噴火の予知と同じように、いかに寿命予測が難しいかが、実感されました。それでも、少しでも、実効性向上と精緻化を目指したいし、また、目指してもらいたいものです。

他方、私事で、申し訳ありません。

お医者さん、看護師さん、老妻等に助けられ、年末には、敗血症に進む恐れがあった、足の血行不良とばい菌の侵入による皮膚潰瘍や鬱血・壊死の危機的状況から脱して、ようやく徐々に快方に転じ、来年の春までには、二足歩行が可能になるまでに回復する見込みができ、夢と希望が湧いてきました。

今後も、リハビリテーションに励んで、知力・体力・学力の回復とともに、生命力の回復を図り、やり残した話の実現を図りたいと思います。また、来年には、中断していた諸学・協会の総会や同窓会等の諸会合への復帰を目指し、また、諸学・協会での研究発表と新たな特許出願の準備を行いたいと思います。数独パズル、クロスワードパズル、応用数学などを楽しんでいるので、頭の働きは、残っていたらしいです。ですが、インターネットを利用した囲碁、麻雀は、まるでダメ。よほど才能がないようです。しかし、懲りずに続ける積りです。

また、振り返りますと、Facebook で、昔、国際会議等を通じて訪れた、世界各国（フィンランド、スウェーデン、オーストラリア、カナダ、フランス、ドイツ、アメリカ、シンガポール、中国、インドなど）の素晴らしい風景や美しい街並みや庭園の映像、あるいは、山・川・海の絶景や、動・植物の生き生きとした生態、美しい虹や星の映像、日本の桜の花や紅葉等に代表される四季の移り変わりの映像、神社・仏閣・花園のライトアップの映像が提供され、楽しむことができました。最近では、世界各国の世界的な建築家の名建築のデザインばかりでなく、無名の建築家等によるインテリア・デザインについても、映像および活字による情報を提供してもらえ、新たな感覚を養うこともできました。また、橋やダム、上水道等の土木遺産の映像や活字による情報も提供して頂き、社会的インフラの実態にも触れることができました。また、Youtube を通じて、いろいろな諸国の民謡（スペイン民謡、ドイツ民謡、ロシア民謡、ネパール民謡、ペルー民謡、インドネシア民謡、中国民謡、日本民謡など）、フランスおよび

日本のシャンソン（パリの空の下で、雪が降る、夜明けの歌など）、日本の懐かしの歌謡曲（青い山脈、有楽町で逢いましょう、喝采、ブルーライト横浜、乾杯、いい日旅立ち、川の流れるようになど）、東日本地震等からの復興支援ソング（スタンド・アロン、花は咲くなど）や、クラシック音楽（美しき青きドナウ、G線上のアリア、別れの曲、新世界「家路」など）、世界のヒットメロディー（虹の彼方に、百万本のバラ、禁じられた遊び、南国の夜など）を、楽しむことができました。Facebook のソーシャル・ネットワーク（SNS）で、いろいろな人、サークル、同好会、企画と繋がり、いろいろな情報発信および情報交換等を持つこともできました。有り難うございました。

また、電子メールや郵便、電話等を通じて、昔からの友人、知人、親族、仕事関連の人々等とのやり取りにより、貴重な情報交換ができました。ありがとうございました。

いろいろな自然とのかかわり、人等のつながりの中で、今年も、間もなく暮れようとしています。寒さが、厳しくなる折柄、また、想定外の天変地異も多くなると考えられますので、皆様、ご自愛ください。来年も元気にやりましょう。皆さま、良いお年をお迎えください。

〇〇2019年 Facebook から

11月19日

血行不良改善のための2度目の手術後、リハビリをしながら、2足歩行ができるまでの回復を目指しています。

夢と希望と情熱と感性と継続と努力を忘れないようにして、命の続く限り、体が動く限り、頭が働く限り、今、やっている話の完成を目指して、来年の研究発表、新規特許出願の準備をしています。

11月17日

友澤史紀先生の訃報に接し、悲しみのあまり、言葉ありません。友澤史紀先生とは、国土交通省建築研究所時代、中性化と鉄筋腐食関連で、一緒に研究を行ったこともありました。心からのご冥福をお祈り申し上げます。

11月11日

曲面シェル構造の RC および FRP の劣化解析の事例を探しています。ご存じの方がおられたら、ご教授願いたい。また、曲面シェル構造には、どのような種類があるのだろうか

10月23日

今日10月23日、日本建築仕上学会での研究発表を終え、無事、土浦の自宅に帰還しました。血行不良改善のための2度目の手術の結果が思わしくなく、今度も、いろいろな人の御配慮を頂き、老妻の付き添いと援護での、車椅子対応でした。台風19号の爪痕で、被災された方々へのお見舞いと復旧・復興を祈願しつつも、自分の責任を果たそうという気持ちでした。下見と受付けのための22日午後の2時間及び、23日全日だけ、雨の晴れ間に恵まれ、車椅子対応も支障がありませんでした。今年3度目の研究発表を無事終えることができたのは、幸いでした。あと、2回ぐらい、車椅子対応での遠出を考えています。宜しくお願いします。

10月21日明日から明後日(10月22~23日)、一泊2日の予定で、東京大学農学部弥生会館一条ホールで開催される日本建築仕上学会2019年学術講演会で、「外断熱材料システムにおける水蒸気移動過程の可視化 その3 熱伝導率の含水率による経時変化に基づく寿命設定の精緻化」というタイトルで、研究発表をします。また、車椅子対応です。宜しく

9月8日

自分の足の不具合の回復も、気になるが、関東直撃の台風による災害も、気になります。

心配したとおり、関東直撃の台風15号が、大変な災害をもたらしたようだ、命と生活のためのライフラインが、ずたずた。被災された方々の心からのお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復旧・復興を願いたいものです。

9月6日

9月4日、金沢工業大学で行われた日本建築学会での研究発表を無事終え、9月5日土浦の自宅に無事帰還ことができました。

今回も、右足の不具合が直りきらない中で、「車椅子対応サービス」を有効利用した形での鉄道旅、タクシー、宿泊および登壇と研究発表でした。幸い、富山・金沢では、雨の晴れ間に恵まれ、雨には見舞われず、車椅子も十分に活用できました。いろいろな人に支えられ、配慮を頂き、老妻の付き添いと全面援護で無事完了できたことを感謝するものです。無事、土浦の自宅に帰還することができました。今後も、リハビリに励んで、生命力の回復を図り、やり残した話の実現を図りたいと思います。宜しく申し上げます。

9月3日

黒部宇奈月温泉駅で途中下車し、黒部、入善の実家の墓参りを終え、今日、金沢につきます。建築学会大会の懇親会に出席し、明日、研究発表を終え、5日、土浦の自宅に戻る予定です。バリアフリー化が、多くのところで進んでおり、いろいろな配慮を受け、車椅子対応でできるようです。よろしく。

7月6日

7月4～5日、名古屋工業大学で行われたマテリアルライフ学会で、昨日2つの研究発表を無事終えることができました。

また、4日の総会で、晴れあるマテリアルライフ学会30周年「功労賞」を受賞しました。今回、右足の不具合が直りきらない中で、「車椅子対応サービス」を有効利用した形での鉄道旅、タクシー、宿泊および登壇と研究発表でした。幸い、東海地方直撃の恐れがあった雨には見舞われず、車椅子も十分に活用できました。いろいろな人に支えられ、配慮を頂き、老妻の付き添いと全面援護に基づくものと感謝するものです。無事、土浦の自宅に帰還することができました。

受賞とともに、無事研究発表を終えられたことは、大きな喜びとなりました。今後も、リハビリに励んで、生命力の回復を図り、やり残した話の実現を図りたいと主ます。宜しく申し上げます。

2019年7月6日 土浦乙戸南にて

福島敏夫

三根先生。誕生日の祝いありがとうございます。まだまだ、元気にやりたいと思います。

2019年6月5日

三根先生。誕生日の祝いありがとうございます。まだまだ、元気にやりたいと思います。

2019年6月5日

岡本 伸様。誕生日のお祝いありがとうございます。あと少し生き抜いて、2, 3やり残したことの實現を図りたいと思います。

2019年6月5日

福島先生、

お誕生日おめでとうございます！

新元号・令和の時代に入り、益々のご健勝と

ご活躍をお祈りしております。

水本光美

2019年6月5日

水本先生、誕生日祝いありがとうございます。74才になります。体の不具合からの回復を図り、まだ元気にやりたいと思います。宜しく。

2019年3月16日

まだ、身体の不具合の多くが、治りませんが、めげずに、リハビリに励んでいます。あと3か月もすれば、遠出が可能になるまで回復するだろうと信じて、今年も、トロイカ方式での研究発表の準備をしています。宜しく。

1) 「二酸化炭素の多方向拡散過程によるコンクリートの中性化進行の可視化 (その7) —半球型拡散における二酸化炭素濃度の経時変化の影響—」という内容で、日本建築学会の電子投稿を終えました。

2) 「ポリビニル系高分子材料の光劣化過程の可視化 (その3) —半円柱形状における紫外線量の経時変化の影響— (報告 No. 1 数学的定式化) 「ポリビニル系高分子材料の光劣化過程の可視化 (その3) —半円柱形状における紫外線量の経時変化の影響— (報告 No. 2 数値解析と可視化) という内容で、マテリアルライフ学会への電子投稿を終えました。

2018年12月27日:Facebookへの記載原稿

今年も、喜怒哀楽いろいろなことがありました。

先ず、地震、火事、風・水害などの想定外の天変地異の自然災害・人災が、多発しました。亡くなられた方々の心からのご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様のお見舞いと、一日も早い復旧・復興をお祈り申し上げます。また、的確な防災・減災対策が講じられることを願いたいものです。

他方、内戦・テロ、いろいろな殺りく事件、教育界・企業等でのいじめ、家庭内暴力、企業のイメージを損なうデータ改ざん事件、スポーツ界等のセクハラ・パワハラ事件、科学技術の信頼性を喪失させる研究不正事件など、悲しく、暗い話もありました。ですが、スポーツ界でのいろいろな快挙、科学界でのすばらしい発見や創造など明るい話題もありました。改めて、欧米文化もすばらしいけど、日本文化のすばらしさも見直されるようになりました。人と自然と地球との融合の大切さ、世界遺産の保存と存続と世代的継承、地域社会の活性化に向けての動きなど、夢と希望を感じさせる話も結構多かったと思います。

私自身は、相変わらずぶり返す腰痛や、握力低下、新たに見舞われた動脈硬化や神経性障害による足・肩・手の痛みや機能低下などの体の不具合に悩まされながらも、散歩と体操を通じてリハビリテーションに励みました。花鳥風月を愛でながら、研究活動を続け、予定していた3つのうちの2つまで研究発表をすることができました。

また、facebook で、昔、国際会議等を通じて訪れた、世界各国の素晴らしい風景や美しい街並みや庭園の映像、あるいは、山・川・海の絶景や動・植物等の生き生きとした生態、虹や星空や四季の移り変わりの映像が提供され、楽しむことができました。一昨年には、桜の開花の映像が、世界各国から流れていました。去年は、花火と灯でした。今年は、虹と星が多かったようです。

また、色々な諸国の民謡（ペルー民謡など）や、懐かしのヒットメロディー（真珠貝の歌など）を、YouTube で、楽しむことができました。

Facebook でのいろいろな繋がり、情報交換等有り難うございました。

寒さが、厳しくなる折柄、ご自愛ください。

来年も元気にやりましょう。皆さま、良いお年をお迎えください。

2018年9月7日

この度、発生した、台風21号による想定外の風・水害、想定外の北海道胆振(いぶり)東部地震で被災された方々の、心からのお見舞いを申し上げますとともに、速やかな復旧・復興を願いたいと思います。

私自身は、かなり無理しながらも、いろいろな方々に助けられ、今年の日建築学会大会で、「二酸化炭素の多方向拡散過程によるコンクリートの中酸化進行過程の可視化(その6)一半球型拡散」の研究発表と耐久性一般のセッションの司会を終え、無事に、土浦の自宅に帰還することができました。

ありがとうございました。

2018年7月21日

昨日、横浜メディア・ビジネスセンター8階の関東学院のサテライトで開催された、マテリアルライフ学会で、「ポリビニル系高分子材料の光劣化過程の可視化(その2)一半円柱形状の場合」という内容で、無事、研究発表を終えました。動脈硬化等で、酒等を控え、安静にして、学会参加も控えるようにという医者からのアドバイスもあったのですが、無理に参加しました。有意義であったと、信じたいと思います。

2018年6月10日

今回の大阪北部大地震の発生に伴い、自分のホームページを更新しました。

2018年6月10日

老妻をはじめ、親族の中には、韓国の歌手の東方神起が好きらしい。私は、別の歌の方が、好きだけど、韓国も、世界に誇る音楽文化の源になればいいのかも。

2018年6月8日

今日、朝、散歩をかねて、たばこを買いに行ったとき、近くの雑木林から、ウグイスのホーホケキョの鳴き声を、2回耳にしました。去年は、5月4日のみどりの日だった。一ヶ月ぐらい遅くなったけど、ウグイスも、春の訪れを感じたらしい。

2018年6月2日

三つ目の研究発表、苦戦しています。境界条件に工夫が、いるらしい。Mathematicaも、うまく解いてくれない。懲りずに、検討中。

2018年5月6日

今年予定している可視化の2つの研究発表のめどが、つきました。3つめの研究発表の準備をしています。少しでも。学術・文化の振興に貢献できれば良いかなと思っています。宜しく。

2018年5月4日

昨年のみどりの日、東京ラーメンを食べに行ったとき、近くの雑木林で、鶯の鳴き声を聞いたけど、今年は、いまだに、鶯は、鳴いていない。燕は、早く再来している。鶯よ、お前は、歌を忘れたのか

2018年4月21日

昔、国際会議を通じて訪れた、諸国の風景や街並みの映像が提供され、懐かしく、思い出しています。また、色々な諸国の民謡を、**youtube** で、楽しんでいます。気持も和らいで、生命力が、蘇ってくるのは、ありがたいなと思っています。今年も、トロイカ方式での可視化の研究発表の準備をしています。葛飾北斎さんを見習い、75才まで続けるつもりです。そのあとは、また、新しいことを、考えます。宜しく。

2017年3月2日

今年も、懲りずに、8月31日から9月3日に広島工業大学で行われる日本建築学会大会に、「二酸化炭素の多方向拡散過程によるコンクリートの中性化進行の可視化（その5）一円筒型拡散におけるステップ応答解析」という内容で研究発表をします。今日、電子投稿を終えました。

化学と建築と土木の融合領域に関連します。

2017年2月24日

今年は、思いのほか、寒波と雪が厳しいようです。北日本、北海道でも、続いているようですね。人の心も、国際情勢も、冷え込んでいるようです。【春は名だけの風の寒さや、谷の鶯、歌は思えど、時にあらずと、声もたてず。】という、早春譜の歌も思い出します。ですが、最近、水仙等の花が咲き、白鷺等も、近くの小川に再来し、命の息吹を謳歌しようとしています。梅、桃、桜が開花する春の訪れも、まもなくと思います。夢と希望と情熱と感性、努力と継続を失わないで、元気にやりましょう。

2017年1月2日

明けましてお目出度うございます。今年も、健康に留意しながら、花鳥風月を愛でながら、元気に、研究活動等と哲学と人との繋がり、良いものの時代を超えた振興を通じて、少しでも、学術・文化の世代的継承に向けて、やりたいと思います。

今年も宜しく申し上げます。

2016年12月30日

今年も、喜怒哀楽いろいろなことがありました。

想定外の自然災害、オリンピック、など。

また、いろいろな同窓会、懇親会に参加し、旧交を温めることもできました。

私自身は、ぶり返す腰痛等に悩まされながらも、花鳥風月を愛でながら、学会発表と研究活動が続けることができました。Facebookでのいろいろな繋がり、情報交換等有り難うございました。

皆さま、良いお年をお迎えください。

2016年12月22日

今度は、糸魚川市の都市火災のようですね。小さい頃、自分の家と小学校校舎が、火事で焼失し、隣の魚津市も、大部分が焼失してしまったことを悲しく思い出します。ですが、それにめげずに、生き抜いた竹馬の友、同級生等を、懐かしく思い出します。建築も、災害の防止ということも忘れないでください。ですが、地球環境問題への対応も重要だと思います。夢と希望を持って、やりたいものです。皆さま、元気にやりましょう。

2016年11月30日

Facebook は、良い友達、立派な人とのつながり、花鳥風月、海・山および懐かしい町並み、文化遺産等の貴重な情報を流しているものと信じたい。ですが、人を陥れるデマゴグ、ガセネタも、結構流れているようです。皆さん、自ら考えて、本物と偽物を見抜くようにしてくださいね。

2016年11月29日

Facebook 色々見ました。寝ましょう。

2016年10月22日

長引いていた USB デバイスの問題（記述子要求の失敗）が一部解決しました。試しに長男に頼んでみたら、うまく解決してくれました。生き方のへたくそな長男も、少し成長したようです。親ばかですが、少し、うれしい気もします。よろしく。

2016年10月15日

最近、USB デバイスをコンピュータが、認識しないという症例が、世界中で進行しているようです。私の USB デバイスの一つも動かなくなりました。下手に OS をバージョンアップしない方がよいようだ。そのうち、OS 関連の企業反省して、改善してくれると思います。良くなるまで待とう。

2016年8月31日

今回、想定外の台風10号による風・水害で被災された東北・北海道の皆さまに、お見舞い申し上げます。

2016年8月29日

福岡での建築学会に参加し無事研究発表を終えました。好評だったと信じたいと思います。また、2つの懇親会で、懐かしい人たちとお会いし、旧交を暖めることができました。極めて有意義だったと思います。

2016年8月22日

このSNSにおける友達のひとりだった、北海道大学准教授の長谷川拓也先生が、ご逝去されたという知らせを受けました。心からお悔やみ申し上げますとともに、ご冥福をお祈りします。

2016年8月29日

通夜も告別式も参列できませんでしたが、弔電と香典を送らせて頂きました。故人は、旧建設省建築研究所時代にともに過ごし、論文の共同研究者でした。また、建築指導課で、ほとんど一人で、建築基準法37条をまとめた俊英であり、北海道大学転出後も、そのすばらしい研究で、将来が期待される人でした。48歳の若さで亡くなられたのは、もう少し生き抜く生命力があったらと悔やまれます。改めて、ご冥福を祈りたいと思います。

2016年8月4日

最近、老妻が、一緒に近くを散歩することを楽しみにしてくれるようになり、乙戸南界限での散歩と花鳥風月の新たな発見を考えつつ、腰痛の改善と、体調の回復に努めています。

8月建築学会に参加のため、福岡に行きます。老妻も一緒に行きます。できれば、久しぶりに、ひびきのを訪れる機会が持てればいいのですが

2016年7月26日

原子力村、温暖化村、宗教等いろいろなネットワークもあるけど、命のネットもあってもいいのかも。

2016年7月20日

今日7月20日、乙戸川で白鷺が羽を休めて、たたずむ姿を目撃しました（調べてみると、白鷺には、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギの4種類がいるそうですが、小川にいたのは、コサギだと思います。黒いくちばしが特徴）。また、道ばたで、黄色の夏の野の花をみつけました（調べてみると、豚菜というヨーロッパ原産の外来種だそうです）。外来種の方が、生命力が強いそうです。

2016年7月11日

ベクトル解析の応用数学を利用して、材料・工法・製品・建造物・地球における、元素・分子等の物質の流れの可視化の研究を考えました。新しい研究の流れとして、科学・土木等の融合における技術・科学の振興に貢献できるかもしれません。

2016年6月28日

今回も、懲りずに、日本建築学会に、「二酸化炭素の多方向拡散過程によるコンクリートの中酸化進行の可視化—円筒型拡散における二酸化炭素濃度の経時変化の影響—」という内容で研究発表をします。

化学と建築と土木の融合領域に関連します。

ノーベルという人は、建設工事における技術開発における貢献を考えて、ダイナマイトを発明したそうです。ですが、自分の発明したものが、人を殺傷する別の目的に使用される

2016年6月27日

乙戸南界限の散歩を続けています。腰痛も緩和され、体調も戻りつつあります。もう少し、生き抜けるかも。

2016年4月27日

遠い人間の祖先から、色々な天変地異に悩ませられながらも、たくましく生き抜いた人類、動・植物の知恵を見直してみるのもいいかも。

花鳥風月の情報を提供します。

今、土筆もたんぽぽも終わって、橙色のヒナゲシと青色の矢車草が、咲き乱れています。近くの沼地には、白鷺が飛んでくるようになりました。生命のたくましさを考えることしきり。自分も、命の続く限り、体が続く限り、頭の働く限り、研究活動等と哲学等が続けたいと思います。宜しく。

2016年4月27日

Facebook への皆さまの対応感謝致します。

ですが、あまり惑わされず、自分のホームページで対応したいとも思っています。宜しく。

2016年4月18日、

ホームページの更新を行いました。宜しく。

2016年3月16日、

しばらく、Facebook への対応を控えていましたが、再開したいと思います。

今日、「二酸化炭素の多方向拡散過程によるコンクリートの中性化進行過程の可視化（その4）－円筒型方向拡散における二酸化炭素濃度の経時変化の影響－」というタイトルで、日本建築学会への電子投稿を終えました。今年は、8月の下旬に福岡大学で行われる予定ですが、可能ならば、皆さまにお目にかかることを楽しみにしたいと思います。

2016年1月30日、

1月もまもなく終わろうとしています。年賀状での挨拶と情報交換、E-mailでの近況報告と挨拶、Facebookでの情報交換や映像提供。色々な形態での繋がりがありがとうございます。体調が今ひとつ優れないのと、亡くなった人等、世相への感慨等もあり、Facebookへの対応を控えていました。ごめんなさいね。最近の私自身の活動等は、ホームページで対応させて頂いています。そちらの方も宜しく。今年も、命と体と頭が続く限り、元気にやりたいと思います。宜しく。

2015年12月30日、

今年も、喜怒哀楽いろいろなことがりました。

内戦・テロ、いろいろな殺りく事件、いじめ、企業のイメージを損なう事件、科学の信頼性を喪失させることなど、悲しく、暗い話もありました。ですが、スポーツ界でのいろいろな快挙、科学界でのすばらしい発見や創造など明るい話題もありました。欧米文化もすばらしいけど、日本文化のすばらしさ、地域での伝統文化の大切等も認識されるようになりました。いろいろな人とのつながりや親交の大切さ、人と自然と地球との融合の大切さ、世界遺産の保存と存続、地域社会の活性化に向けての動きなど、未来を指向した話も結構多かったと思います。私自身は、ぶり返す腰痛等に悩まされながらも、花鳥風月を愛でながら、学会発表と研究活動が続けることができました。世相と健康に留意しながらも、命の続く限り、体が動く限り、また、頭の働く限り、自分独自の研究等を通して、世界人類の繁栄に、曲がりながらも貢献したいと思います。来年藻元気にやりましょう。皆さま、良いお年をお迎えください。

2015年11月4日、

しばらく、Facebook への対応を控えていました。ごめんなさいね。

最近、応用数学と Mathematica を使用して、材料システムの劣化機構の数学的定式化と可視化の研究を推し進めています。建築材料に関わる環境調和型材料の開発と評価に関する調査研究も行っています。ぶり返す腰痛に悩ませながらも、花鳥風月を愛でながら、懲りずに、日本建築学会、日本仕上学会、コンクリート工学会等での研究発表と執筆、論文査読などの活動を続けています。ただ、家に閉じこもりになりがちなので、できるだけ、外に出ることも必要かもしれません。子供は、元気にやっていますが、孫は期待できるか？ 少子高齢化もあり、できる限りやり続けたい。今後ともよろしく。

2015年3月23日

皆様、それぞれの立場で元気の御活躍のことと思います。小生、学術研究へ思いがつきず、懲りずにやっています。今年の建築学会2015で、「二酸化炭素の多方向拡散過程によるコンクリートの中酸化進行の可視化（その3）－円周部から中心方向への円筒型拡散－」というタイトルで電子投稿を終えました。

学術の振興に少しでも貢献できれば、幸いに思います。

2015年1月1日

あけましておめでとうございます。

去年は、喜怒哀楽いろいろありました。

今年は、若者が夢と希望を持って、元気にやる年となってもらいたいですね。

問題は、山積していますが、私も体調の回復をはかりながら、学術等の貢献に元気にやりたいと思います。

本年もよろしく申し上げます。

2014年12月30日

2014年もみそかとなり、あと1日を残すことになりました。今年は、胸が痛むことも多かったのですが、明るいニュースも多かったと思います。皆様とのつながりで、多くの知見と心和む話も得ることもできました。ありがとうございました。

良いお年をお迎えください。福島敏夫：<http://fukushima institute-net.jp/>

2014年12月20日

最近なりを潜めていましたが、再開したいと思います。

今日、早稲田大学で行われたウルフラム・リサーチの2014年東京大会シンポジウムに参加しました。参加費は無料でしたが、Mathematica Ver.10についての情報とヒントを得ることができました。今後の研究に役立てたいと思います。

Bing で門司港の木造駅舎の内容について取り上げています。検索してみてください。

2014年10月1日

今日、たまたま、2011年東日本大震災で津波の被害をうけ、消失後今年2014年復旧した六角堂を含む岡倉天心の日本画推進の地北茨城の五浦を訪れました。分野は、違うけど、先人の偉大な業績に感じることしきりでした。日本文化のすばらしさも認識し、世界一を目指す情熱と根気と継続の必要性を、改めて認識しました。

2014年4月18日

腰痛等の体調の不具合もあり、なりを潜めていましたが、活動を再開したいと思います。パソコンは、windows 8. 1を購入し、windowsXPのデータの引っ越しを完了しました。ですが、MicrosoftのXPサポート終了後もNortonとMathematicaのサポートを継続するというメッセージがあり、2つのパソコンを両方とも使用しています。皆様とのつながりを大切にしたいと思います。よろしく。

2014年3月18日

昨日、20年ぶりに、水戸の偕楽園を訪れました。梅祭りとうことで、賑わいを見せていました。震災を受けた好文亭も復旧され、3階建ての木造建築とそれと連結した奥の院を感慨深く鑑賞しました。また、ついでに、徳川記念館を訪れ、徳川水戸家の歴史をまなびました。他方、近代美術館を訪れ、岡倉天心、横山大観らの近代日本画などを鑑賞し、感慨を受けました。研究とは別に、優れた先人の情熱と業績に見せられました。今後も、美術館巡りをやろうと思います。

2012年12月17日

コンクリートの中性化進行過程の数学的定式化とMathematicaVer.8による可視化を行っています。また、建築学会等の諸学会での材料がらみの環境配慮技術・評価に関する過去10年間の研究テーマのリストを作り、分類化を行っています。

2012年12月17日

65才の定年になり、10年務めた北九州市立大学を退職し、土浦の自宅に戻ってから1年半になります。近くの公園の周りを30分ほど散歩しながら、体調の回復を図る傍ら、囲碁、クロスワード・パズル、数独パズル、グランドゴルフなどを楽しみながら、セカンドドライ

フ・サードライフを模索しています。悠々自適と思ったのですが、まだまだがんばろうと思って、自宅を基に、福島建築材料研究所2を勝手に作り、再出発を試みています。まだ法的手続きは済んでいませんが、ホームページ (<http://fukushima-institute.net/>) を立ち上げてみました。いろいろな学・協会は退会しないで会員を続けて、諸分野の研究情報を得ています。6月の末、定年退職の区切りと女房孝行を兼ねて、5泊8日の行程で、フランスの建築の世界遺産巡りに行ってきました。その紀行文も含めて、科学者の心と文筆の才能を併せ持っていたという寺田寅彦さんにあやかりたいと思い、日々気がついたことを随筆にまとめています。今年は、再度の政権交替もあり、新たな未来を指向しないといけないと思いますが、過去の歴史も踏まえて、如何にして、持続可能な建築・都市・社会の基礎としての環境調和型建築材料・部材のあり方を考えたいと思います。

2012年12月17日

6月の末、定年退職の区切りと女房孝行を兼ねて、5泊8日の行程で、フランスの建築の世界遺産巡りに行ってきました。その紀行文も含めて、科学者の心と文筆の才能を併せ持っていたという寺田寅彦さんにあやかりたいと思い、日々気がついたことを随筆にまとめています。

福島建築環境材料研究所2 主宰論説集（主宰 論説1～20）

主宰論説20

メルボルン市及び周辺探訪記

平成 20 年（西暦 2008 年）9 月 21～25 日の 5 日間オーストラリアのメルボルン市で、「持続可能な建築に関する世界会議（2008）（sb2008）」が開催された。福島敏夫は、「LCA マルティ・エコインディケータによる建築用複合材料の環境調和性評価」といタイトルでの研究発表のために参加した。昭和 57 年（西暦 1982 年）の中期留学の際、アメリカおよびカナダに赴いたとき以来、夫婦同伴で出かけた久しぶりの海外旅行でもあった。これは、北九州市立大学在籍時、この国際会議に参加するまでの旅の途中、国際会議前後・途中でのメルボルン市内の観光および会議後の周辺の「グレート・オーション・ロード」やフィリップ島等の景勝地を訪れた際に、感じたこと、気付いたことを含めて、よもやま話を記した紀行文である。老妻が、日々の行動を克明に記録していたのがベースになっている。

1) メルボルン市に到着し、無事ホテルにたどり着くまで

通常は、メルボルン市までは、福岡国際空港からシンガポール・チャンギ空港を経由して、カンサス航空で赴くのだが、その年は、メルボルン国際マラソンで込み合っており、国際会議開催の期日に間に合うような切符が取れなかった。それ故、キャセイパシフィック航空を利用して、香港経由で行くことになった。福岡とメルボルンは、時差はあまりないはずであるが、トランジットの香港国際空港での 2 時間半の待ち時間も含めて、メルボルン国際空港に到着するまで、16 時間とかなり時間がかかった。また、予約したはずの「アイリス・ホテル」が、メルボルン市内の本店ではなくて、市のはずれにある系列のもう一つ小さな同名のホテルであったらしく、タクシーを使って、たどり着き、ようやく 9 泊の手続きを済ませることができた。帰りの航空便もスケジュール的に、会議後 4 日後になるなど、最初から、トラブルに巻き込まれ、前途多難な旅になりそうな予感がした。

2) 国際会議の概要とコンファランス・ディナー

この国際会議（sb08）は、CIB（建築研究国際協議会）およびCSIRO（オーストラリア連邦科学産業研究機構）共催で行われた「持続可能な建築」に関する 2 回目の国際会議であり、平成 17 年（西暦 2005 年）に、CIB と日本の国土交通省共催で、東京で行われた「持続可能な建築世界会議 2005（sb05）」に続くものである。メルボルンコンベンション・ビューローが会場であり、「材料および構造工学における環境調和型設計法」に関する RILEM（国際材料・構造試験研究機関・専門家連合）と/CIB の合同国際委員会のメンバーの一人でもあった CSIRO のフォーリンテ博士も組織メンバーの一人であった。日本からは、独立行政法人建築研究所の理事長の村上先生も参加されていた。ハイアット・ホテルで開催されたコンファランス・ディナーでは、(株)積水ハウスから参加されていた女性と隣り合わせになり、歓談を楽しんだ。

3) 市内観光と食事

南半球であるので、季節は春で、日中は、温かく、桜、シクラメン、チューリップが咲いているようだ。風が強く、寒いときもあり、ノースリーブの人もいれば、ウィンド・ブレーカーを着ている人もいる。メルボルンは、シドニーに次ぐオーストラリア第2の都市であり、キャンベラができるまでは、首都だった。イギリスのビクトリア朝時代の古い建物も多数残っているようだ。市内には、トラムカーが機略縦横に走っていて、市内観光や買い物等には、便利であるようだ。国際会議の日程終了後、一日の市内観光を行った。クイーンビクトリア・マーケット、フラッグスタック・ガーデンなどを訪れた。クイーンビクトリア・マーケットは、食料、衣類などあらゆるものを扱っている市内大市場である。寒いときに備えて、ウィンド・ブレーカーを購入した。また、フラッグスタック・ガーデンを訪れ、メルボルン港全体を見渡せる景観を楽しんだ。この庭園は、イギリスからの入船、出船の度に、旗竿（フラッグスタッフ）に旗が掲げられたことが、名前の由来らしい。夕食のために、レストランで、ステーキを食したが、最低300gもあり、食べきれないくらい。オーストラリア・スタイルらしく、多すぎるくらいであるようだ。老妻は、福島敏夫が国際会議に参加しているとき、一日チケットを使って、一人で市内観光をして、世界遺産にもなっている王立博覧会ビル等を訪れていたらしい。

4) 「グレート・オーション・ロード」探訪記

このロードは、退役軍人らが切り開いたという海岸道路である。道路沿いの海岸には、多くの絶景ポイントがある。「石灰岩」が浸食されたできた奇岩である「12の使徒」、ロンドンからの最後の移民船が難破し、54人中2人しか生き残れなかった場所である「ロンドン・ブリッジ」などがあつた。それにしても、オーストラリアのメルボルン近傍の海岸地帯に、よくもこのような奇岩の絶景が形成されたものだと、感心することしきりであつた。途中、マイツレストの熱帯雨林を散策。ケネット・リバーの動物園で、火食鳥、コアラ、ウォンバット、カンガルーを見た。オーストラリア固有の動物類であるが、最近、生存数が減っていて、絶滅の恐れがあるということである。持続可能な発展のためには、生物多様性にも配慮すべきでないかという強い思いに襲われた。ガード付きの早朝から夕方までの約12時間のツアーであつた。疲れて、死んだように眠つた。

5) フィリップ島のペンギンの行進探訪

フィリップ島を訪れ、サマーランドビーチで、日没から、愛らしいリトル・ペンギンの行進を見学した。それにしても、海岸からかなり離れた叢の巣まで、多数のリトル・ペンギンが、隊列をなして、よちよちと行進し、海で捉えた餌をひなに与えるという行為は、天敵から身と雛を守り、小動物種の子孫繁栄のために身に着けた術として、感動ものである。また、コアラ保護センターを訪れた。コアラは、ユーカリの葉しか食しないという不思議なオーストラリア固有の珍獣であるが、20時間ぐらい、ユーカリの木の上で眠っているという。人間は、幾ら寝ても、8~10時間ぐらいといわれる。よくそんなに眠れるものだなと思うことしきりであつた。

6) 「ブルー・ダンデノン、パフィンビリ、ヤラ・バリー、ヒールズビル、サンクチュアリ探訪

ダンデノン丘陵で、木生【シダ】の様子を鑑賞。温帯雨林地帯で、恐竜がいた時代から今に残る植物の一つで、木のように茎を伸ばすようである。500種類のユーカリの木があり、100m近くの高さになるものもある。コアラは、そのうちの数種類しか食べないという。好き嫌いで、生き抜けるものかなと思った。パフィンビリで、峡谷鉄道で、蒸気機関車に乗って20分の鉄道の旅を楽しんだ。旧建設省建築研究所（現在国立研究法人建築研究所）入省時、親睦のために、当時の同僚らと行った日本の大井川鉄道における蒸気機関車の旅以来である。最近、気候変化への対応の動きの中で、蒸気機関車は、廃止される趨勢にあるようだが、すべて失くしてしまうのはどうなのかなと思った。ヒールズビル・サンクチュアリで、ゆっくりコースで、案内人について、コアラ、カンガルー、カモノハシ、ペリカンなどの動物の動態を観察した。それにしても、オーストラリアには、不思議な動物固有種が多いものだった。

7) メルボルン市を後にして、無事北九州市の教員宿舎にたどり着くまで

真夜中に、キャセイパシフィック航空でメルボルン国際空港を出発し、香港国際空港を経由して（ドラゴン航空とキャセイパシフィック航空の飛行機の同時運航）、福岡国際空港に翌日の昼（2008年9月30日）に到着した。その後、特急で、博多から折尾駅に到着後、バスを利用して、「ひびきの」にある教員宿舎についた。何とか無事に行って帰ってこられて、安堵した次第である。

8) 後記

今回、腰が痛い、足が弱いなど、健康状態に不安もあったが、結果的にはうまく運び、何とか無事に行って帰ってこられた。老妻との二人三脚の「弥次喜多道中」であった。

地球における水と炭素と窒素の物質循環

地球では、地圏、水圏、大気圏及び生物圏で、水、炭素、窒素などの元素及び物質の循環が起こる。この時の源は、太陽からさんと地球に降り注ぐ太陽エネルギーである。また、地球に存在するエネルギー・資源は、再生産可能な水力、風力、森林、生物などの非枯渇性資源と、再生産不可能な枯渇性資源である鉱物、化石、岩石資源に分けられる。人類は、これらのエネルギー・資源を利用して、生活を豊かにし、使い終わった後は、地球に戻すというサイクルで成り立っていた。すなわち、これらの基本元素の物質循環によって、正常な地球の生態系、気候も保たれていた。しかし、枯渇性資源の利用に頼りすぎた大量生産・大量消費・大量廃棄型の欧米型物質文明と人類の長年の諸活動の結果、このサイクルが描けなくなり、地球環境問題等の諸々の難問に直面している。非枯渇性エネルギー・資源の利用率を上げるととも

に、枯渇性資源は、3 R (Reduce(廃棄物減容化)、Reuse(再使用)、Recycle(リサイクル)) の徹底化を図る必要がある。国連でも提唱されている持続可能な開発 (SDGs) の一環として、再度、持続可能な資源循環型・環境調和型の建築・都市・地域・国土・地球・社会の形態に軟着陸させる必要が叫ばれている。

夢と希望と光

自然災害と伝染病と持続可能な経済の回復の同時解決は、かなり難しいと思われるが、人類の英知を結集して、乗り越える必要があるようだ。2011年に起こった東日本大震災や原発事故および相次いで起きた想定外といわれた余震、風・水害で、日本は自然災害に見舞われやすいということを改めて思い知らされ、また、これまでの価値観の変更も免れなかった。今年の冬は、暮れから年の初めおよび2月後半まで2度にわたり大寒波と冬の嵐に見舞われた。北海道・東北・北陸・山陰地方では、暴風雪という雪害があり、日本全国でも、大雪に見舞われた。北米でも、想定外の大寒波と降雪による停電等の報道がなされている。南米のペルー沖での海水温が1~2℃低くなっているラニーニョ現象によるとも言われているようだ。世界中での新伝染病が、なかなか沈静化せず、1年延期となった東京オリンピックも、無事開催されるかの懸念もある。だが、梅、桃、桜が開花する春の訪れも間もないという兆しがみられる。植物は、季節がくれば開花し、毎年、生命の息吹を発露することは、すばらしいことではないかと思う。能天気と言われようが、再度、夢と希望と光が見えてくることを期待したいものである。

令和3年2月19日

自由俳句：雪の中芽を膨らませるフキノトウ

自由短歌：春時雨大浪小波にもまれても描いた希望は生きるためのすべ

主宰論説19

パリ市内探訪記

1) ルーブル美術館

パリ市内の観光の一環として、先ず、ルーブル博物館を訪れた。約30年前に訪れたときは、補修と改築の最中で、「モナ・リザ」の絵と、「サモトラケ島のニケ像」という彫刻を主に見たのを覚えている。今回は、フランス政府の肝いりで全面的な改築がなされ、ガラスのピラミッドなどもあって、様相を一新した新ルーブル美術館への訪れであった。あまりにも広い館内にあるすべての芸術品を鑑賞しようと思うと、一週間以上かかるのではないかと思った。ガイドの案内により、主な芸術作品を駆け足で回って鑑賞した程度であった。今回も、「モナ・リザ」の像を見たが、見物客のあまりの多さ故、ゆっくり見ている暇がないくらいであった。「ミロのヴィーナス」、「サモトラケ島のニケ像」は、今回も、その優美な姿態に、改めて、深い印象を持った。その他、ドラクロアの「民衆を率いる自由の女神」、ダビッドの「ナポレオン1世の戴冠式」などの絵は、その作者の大いなる構想とすばらしさに感じ入った次第である。

平成24年6月25日

自由俳句：

ルーブルの美術の華麗さ麦の秋

令和3年2月7日脱稿

自由俳句：

モナ・リザの不思議な笑い寒椿

2) オペラ座

オペラ座は、パリの中心エリアにあり、シャルル・ガルニエの設計による劇場であり、16世紀の古典様式とバロック様式からなる。ガルニエ宮とも言う。優美で豪華なその館内と観劇場内の大空間と装飾は、熱気にあふれた観劇の様子を彷彿させる。今回、幸い上演の日ではなかったのですが、その雰囲気を見学することができました。天井には、シャガールの油絵でかくされているが、もともとは、ルヌブの天井画があったらしい。このオペラ座の界限は、大きなホテルやギャラリー・ラファイエット・デパートなどの建築群が軒を連ね、日本料理店もいくつかあり、日本人観光客には、買い物や食事にも便利なエリアらしい。ただスリが多いので、気をつける必要があるようだ。今回、一緒に行った老妻と、観劇場内ではぐれ、慌てるトラブルもあったが、その素晴らしさに大いに感激した。

平成24年6月25日

自由俳句：

オペラ座の観劇仕切るは怪人か

令和3年2月5日脱稿

自由俳句：

オペラ座の天井飾る名画かな

3) ノートルダム寺院

セーヌ川の中州のシテ島にあるノートルダム寺院を訪れた。聖母マリアの寺院という意味である。ゴシック建築を代表するローマ・カトリック教会の大聖堂である。月曜日であったが、結構見物客で賑わっていた。入場無料というのも、手頃に訪れることのできるフランスの建築の世界遺産として人気があるようである。昔、ナポレオンの戴冠式が行われた場所であり、ヴィクトル・ユーゴーの「ノートルダム・ド・パリ」（邦題：ノートルダムのせむし男）の舞台ともなった。寺院内部は、バラ窓という美しいステンドグラスの広い空間が3つほどあり、その壮麗さは印象的であった。ステンドグラスには、キリストの一生が描かれている。また、入り口正面の「最後の審判」など見事な彫刻も印象的であった。

平成24年6月25日

自由俳句：

陽光にまばゆく映えるノートルダム

最近、この寺院の上部の屋根部分が、火災で焼失したというニュースが、世界中を驚かせた。このフランスの建築世界遺産の復興・修復を廻り、寄付金、復興・修復のあり方が議論されている。新型コロナウイルス禍の影響による景気落ち込みの影響などもあり、寄付金も思ったほど集まらず、難航気味だと聞いている。昔の伝統材料を使った復旧ばかりでなく、先端材料・部材の活用も含めて、より良い方法で、新たに生まれ変わるのを期待したいものである。

自由短歌：令和3年2月8日脱稿

教会堂ドーム型屋根シェル構造想定し支える素材に思いを巡らす。

4) サン・シャペル寺院

ノートルダム寺院の近くに、サン・シャペルの教会があり、そこを訪れた。「ゴシックの宝石」といわれ、後期ゴシック建築を代表する寺院である。ルイ9世の命で、キリストの聖遺物を安置するために、1248年に完成したという古い教会である。上階の礼拝堂は、旧・新約聖書の物語を描いた1,000個以上のステンドグラスに埋め尽くされ、これまでのどの寺院のもの以上に美しかった。添乗員のすすめに応じて、訪れてつくづく良かったと思った次第である。

平成24年6月25日

自由俳句：

壁面のまばゆい光の寺院かな

令和3年2月8日

自由短歌：

あまたのステンドグラスを通り抜け青い光のきらめく礼拝堂

5) モンパルナスの高層タワー

ヴォーボワールなどの作家や芸術系有名人の墓が多いモンパルナス墓地の近くにモンパルナス高層タワーがあり、パリ市街を眺望できる。最上階は、展望台とミニ・スナックがあり、夕方そこを訪れ、サンドイッチを食した。最近できたタワーであるが、パリ全体の夜景の概況を見渡すことができた。

平成24年6月25日

自由俳句：

摩天楼眼下にきらめく夜のパリ

6) オルセー美術館

およそ30年ぶりにこのオルセー美術館を訪れた。マネ、モネ、セザンヌ、ルノワール、などのフランスの印象派や、ゴッホ、ゴッガンなど、後期印象派の画家の多数の作品が展示されていた。この建物は、もともとは、1900年のパリの万国博覧会に合わせて、オルレアン鉄道

によって建設されたオルセー駅の鉄道駅舎兼ホテルであった。設計者はヴィクトール・ラルーである。取り壊しの話もあったが、19世紀美術を展示する美術館として生まれ変わったものである。美術館の中央ホールは地下ホームの吹き抜け構造をそのまま活用している。建物内部には鉄道駅であった面影が随所に残っている。オルセー美術館は、前述の印象派や後期印象派など19世紀末のパリの前衛芸術のコレクションが世界的に有名だが、19世紀の主流派美術で後に忘却されたアカデミズム絵画（アール・ボンピエ）を多数収蔵・展覧し、その再評価につなげていることもこの美術館の重要な活動の側面であるようだ。鑑賞した主な絵画は、アングルの「泉」、カバネルの「ヴィーナスの誕生」、マネの「草上の昼食」、ドガの「踊りの花形」、ルノアールの「ムーラン・ド・ギャレット」、セザンヌの「台所のテーブル」、ゴッホの「ひまわり」と「自画像」、ゴーギャンの「タヒチの女達」である。審美眼のある人ならば、それぞれの絵の特色と価値がよくわかるのかもしれない。しかし、凡人の私は、すべて立派に見えて、甲乙などつけ難いとの印象を持った。ただ、フランスの「古き良き時代」の美術の流れは、少しは、理解できたと思われる。

平成24年6月26日

自由俳句：

名絵画半日過ごす美術館

7) シャンゼリゼ通りの建築群

コンコルド広場から凱旋門にかけてのシャンゼリゼ大通りを歩いてみた。マロニエとプラタナスの街路樹が整然と並び、西側には、カフェ、レストラン、映画館、アーケードなどが並ぶパリ西北部の繁華街であり、世界でもっとも美しい通りと称されるのも、あながち誇張ではないと思われた。余談になるが、トイレの借用に立ち寄ったビルは、電気自動車の陳列を業務としていた。時代の流れを先取りしたものである。

凱旋門には上らなかったが、ロワール広場で、凱旋門を背景に、写真を撮った。

平成24年6月26日

自由俳句：

シャンゼリゼ夏の緑の木立かな

8) セーネ河畔の建築・彫刻群

バトームッシュという船会社のアルマ橋発着の「セーヌ川ディナー・クルーズ」を満喫した。夜のイルミネーションに彩られて、いくつかの橋を越えながら、1時間ぐらい、豪華客船のディナーを味わった。途中、セーヌ河畔の建築群と自由の女神像、エッフェル塔を眺望できた。

平成 24 年 6 月 26 日

自由俳句：

セーヌ川光に浮かぶ建築群

花と鳥と蝶

花や鳥および蝶は、それら単独でも美しく趣深いものも多い。しかし、これらを2つ以上組み合わせた構図や情景は、また別の感慨深い趣向と芸術を生むようである。古くは、「梅に鶯ホーホケキョウ」というように、春一番の花の梅には、鶯が組み合わせとして知られていたが、最近では、目白との組み合わせが多いようであり、実際、梅の花近くでの目白の姿も多い。また、余談になるが、最近、鶯の鳴き声は、4月から5月の晩春から初夏にかけて、雑木林で聞くように変わったようでもあり、「梅と鶯」の取り合わせは、とんと見かけなくなった。しかし、古来、花と鳥の組み合わせは、江戸時代の奇想の絵師の伊藤若仲の『動植綵絵』（どうしょくさいえ）にもよく見られる。桜との組み合わせも、「桜と鷹」という葛飾北斎「長大判花鳥図」の連作の浮世絵にみられる取り合わせが、有名である（最近、福岡市の美術品市場で、火鉢の側板の版木画として描かれていたのが、発見されたという報道があったようである：読売新聞2021年1月26日朝刊）。また、昔から、花と蝶の組み合わせも論じられることも多い。花札では、「牡丹と蝶」を組み合わせたものがある。他方、春の野の花である菜の花の間を飛び回るモンシロチョウやモンキチョウの組み合わせも結構多い。他方、最近では、ツバメや白鳥などの鳥だけでなく、蝶も、花を求めて、渡りをする種類もあることが知られるようになってきた。「アサギマダラ」は、ヒヨドリバナやフジバカマの花にとまる姿がみられるが、沖縄と日本の1,300kmの間を渡る蝶のようである。また、「オオカバマダラ」は、大集団で、カナダ南部からメキシコ北部間を5,000km以上におよぶ大移動をするようである。主に、幼虫の食草を確保するためとも言われているが、美しい蝶も、生存と子孫繁栄のための工夫と遺伝子プログラムの故かもしれないという。

令和3年2月8日

自由俳句：

大移動花を求める蝶々かな

主宰論説 18

ロワール渓谷古城探訪記

前日、トゥール・ジロドーというホテルに宿泊し、ロワール地方に向かった。これは、フランス中部のロワール渓谷の古城めぐりの紀行文である。

アンボワーズ城とシュノンソー城は、シュリー・シュル・ロワールとシャロンヌ間ロワール渓谷にある古城である。アンボワーズ城は、古代ローマ時代の砦を基にして、15世紀の末に、シャルル8世が完成させたもので、シャルル7世、ルイ11世、シャルル8世、フランソワ1世らのバロア王朝の国王たちが過ごしたようである。フランソワ1世は、シャルル8世の後を引き継いで、フランス・ルネッサンスを高めようとし、16世紀の不世出の天才といわれる「モナ・リザ」の絵を抱えたレオナルド・ダ・ビンチを招聘した。彼は、フランソワ1世のために、この古城で3年を過ごし、様々な設備を設計した。1519年にクルーで死去したが、彼の遺志に従って、彼の遺体は、アンボワーズ城のサン・フロランタン教会堂に葬られている。「モナ・リザ」の絵自身は、現在パリのルーブル博物館にあるが、元々は、この古城に持参したようだ。このフランソワ1世は、対外的には、イタリアやスペインとの戦争に敗れ、スペイン戦争で、自身カール5世の捕虜になるなど、失敗続きであったが、対内的には、貴族を制圧して、王権を高め、「フランス・ルネッサンスの父」と言われるように、文化的興隆に貢献した名君であったようだ。反面、新・旧教徒の対立の源になったというマイナス・イメージもあるようだ。アンリ2世は、フランソワ1世がスペインの捕虜になって、釈放の交換人質としてスペインに送られることになった折、侍従の娘に心打たれる態度で送られたことを覚えていたようであり、その娘が、ディアヌ・ド・ポワティエである。残念ながら、時間の関係で、この古城には入らず、ロワール川の対岸から、遠景を眺めたただだったが、十分にその歴史的な趣を感じ取ることができた。

次いで、ロワール川の支流シェール川に浮かぶように立つ白亜の城であるシュノンソー城を訪れ、城の内部の部屋と庭園を鑑賞した。先ず、この城を築くために、トマ・ボイエとその妻カトリーヌ・ブリソネが、マルク家の城塞と水車を壊し、塔の部分のみを残したそうだ。その前庭と塔を眺めつつ、壮大なシュノンソー城の城門を抜けると、城の築城に貢献したトマ・ボイエとその妻カトリーヌ・ブリソネの紋章と「シュノンソー城が完成したならば、私の名は歴史に残る。」という意味の金言の句碑が見られる。並々ならぬ自負であったようだ。次いで、礼拝堂があり、やはり、祭壇の右手の石細工の祭器卓に、ボイエ家の金言が刻まれている。さらに行くと、当時の国王アンリ2世の愛妾であったディアヌ・ド・ポワティエの部屋と、皇后であり、未亡人となった、カトリーヌ・ド・メディシスが摂政として執務をとったという緑の書斎がある。その他、図書室、ギャラリー、厨房、フランソワ1世およびルイ14世のサロ

ン、五人の王妃の居室などがあって、当時の王、后らの生活ぶりが偲ばれる。この城は、16世紀から6代にわたって、女性が城主であつたらしい。また、この城には、ディアヌ・ド・ボワティエの庭園とカトリーヌ・ド・メディシスの庭園と2つの大きな庭園がある。愛妾の庭園の方が、大きくて立派に見えるのは、考えて見ると、不思議な気がする。ロワールの古城は、数あるけれども、シュノンソー城の内部と庭園を集中的に鑑賞することになった。いずれにせよ、フランス中部のロワール渓谷にある古城は、バロア朝時代の王、妃らが過ごした中世の趣を残す名城が多いようだ。

平成24年6月24日

短歌：ロワールの古城を廻る時ふと思う愛の葛藤人の世の常

令和3年1月25日

俳句：澄んだ水浮き城支える青さかな

科学と芸術

最近、科学と芸術の融合がかなり喧伝されている。もともとは、別々に発達したものであるが、現代は、その融合の価値が、認められ出したということらしい。想像力と創造力、新しい着想や閃きには、異分野の知識や感受性が、役に立つということであるようである。科学にも、自然科学だけでなく、人文科学や社会科学もある。芸術も、建築などの造形美に関するアポロ的芸術や、音楽などの陶醉美に関するディオニソス的芸術もある。簡単に融合というが、このような、多岐にわたる分野の融合は、果たして可能なのであろうか？だが、20世紀最大の天才科学者と称されるアインスタイン博士が、バイオリンの演奏の名手だったという。芸術的な感受性は、新しい自然科学的発見につながるということかもしれない。最近、最先端のデジタル技術と、日本の伝統的な保存修復技術による手技や感性の融合により作られた、高精細な再現文化財（クローン文化財）というものがあり、喪失した名画や名彫刻や仏像を復刻させる話もあるようである（宮廻正明「クローン文化財」学士會会報，928，2018）。科学技術が、芸術の存続と再生に役立つことの実例であるようだ。

令和3年1月24日

俳句：雪景色夜空に浮かぶ遠い星

短歌：お釈迦様クローンで復活文化財

ドレスデンおよびマイセンタ探訪記

平成 11 年（西暦 1999 年）、大濱先生(当時日本大学工学部建築学科教授)が、議長を務める「高分子材料とコンクリートの接着」に関する第 2 回 RILEM 国際会議 (ISAP'99) が、ドイツのドレスデンの国際会議場で開催された。福島敏夫は、「高分子材料で表面仕上げをされた中性化したコンクリート中の水と酸素の同時移動による鉄筋腐食進行に関する理論的解析」という内容での発表を行うために、この国際会議に参加した。会議終了後、ドレスデン工科大学のキャンパスの中庭で、懇親会があり、有名なドイツのザッセ教授も参加されていた。ドレスデンの市内観光を行い、また、村上先生(当時秋田大学土木学科教授)と一緒に、マイセンの町を訪れた。これは、その時の紀行文である。

(1) ドレスデン探訪

ドレスデンの町は、東独の方のザクセン州にあり、ポーランド王を兼ねていたザクセン国王フリードリヒ・アウグスト 1 世の首都である。エルベ川の谷間に発達し、古い宮殿建築が、立ち並んでいたが、ドレスデン城が有名である(ドレスデン中心地区のエルベ河畔は、その美しい景観が認められて、ドイツの世界自然遺産になっていた。最近、橋が建設され、景観が変わったという理由で、遺産登録を抹消されたようである。景観の維持とインフラストラクチャーの整備とのバランスが必要であるようだ)。城壁に描かれているマイセンの白磁を使った「君主の行進」の陶彩画が有名である。当時、石炭を燃やすために、壁が、やや黒ずんでいたのが、気になった。また、空襲で崩壊したが、その後再建された「聖母マリア教会」も訪れた。地下 2 階を含む 5 階建ての教会建築であり、今は、ドレスデン市のシンボルにもなっているようである。

(2) マイセン探訪

マイセンは、ヨーロッパの白磁器の発祥の地である。日本の白磁に対するあこがれから、ザクセン王が、白磁技術の振興を図ったために、マイセンの白磁開発がなされ、ヨーロッパにおける白磁文化の中心地区となったという。日本の白磁も、もともとは、李氏朝鮮の李参平が、日本に白磁技術をもたらし、日本の白磁技術の源になり、有田焼として開発されたのが始まりである(李参平は、有田焼の陶祖として、今も、大きな影響力がある。昔、2002 年北九州市国際会議場で開催された「景観フロンティア国際シンポジウム」の際、この李参平が、旧鍋島藩の要請を受けて、白磁の源になる陶土を探り当て、白磁を開発するまでの過程を、動画で見たことがあった。)。極東の朝鮮、日本およびヨーロッパにおける陶磁器を介した東西文化交流の一つの事例かもしれない。このドレスデンの白磁技術の詳細を展示しているマイセンにあるドレスデン磁器博物館を訪れた。かなり大きな壺に近いものも含めて、大小の白磁の数々あり、圧巻であった。マイセンの町並みは、簡素な白を色調としていた。マイセン聖母教会は、ドイツのプロテスタント教会で、マイセンの旧市街地の中心部であるマルクト広場にある。外観は漆喰の石造りが美しいゴシック様式になっているようだ。その街並みも、昔ながらに残っていた。

令和3年1月24日

俳句：エルベ河夕日に映える建築群

(令和3年1月25日修正版)

主宰論説 17

西安探訪記

平成7年(1995年)中国の西安市(昔の長安)の西安交通大学で、科学技術振興調整費総合研究「材料のエコマテリアル化のための設計・評価に関する研究」(平成5～9年度)(エコマテリアル・プロジェクト)の一環として、「第2回エコマテリアル国際会議」が開催され、「建築用複合材料のリサイクル設計」というタイトルでの研究発表のために、参加した。当時、未踏科学技術協会の事務局を担当していた末次(旧姓松尾)さんや、津田さん、プロジェクト代表で世話人の原田氏【現在、エコマテリアル・フォーラム会長】らの、西安までの渡航についての精力的な、取り計らいもあって、八木エコマテリアル研究会幹事長を団長として、ツアーを組んで、プロジェクトメンバーの多くが参加した。日本航空で上海まで行き、中国東方航空で西安まで赴いた。一緒に「複合材料のエコマテリアル化」の研究をやっていた化学関連の研究者の静岡大学の上野先生(今は、故人)と化学技術研究所主任研究員の松崎氏(今は故人)の両氏が、当国際会議で、「高分子材料のリサイクル技術」関連での研究発表のために、参加していた。また、「化学的改質による木材のエコマテリアル化」関連で、森林総合研究所の大越さん、瀬戸山さんなども参加していた。また、関西大学の和田先生、中野研究員も、「廃棄物の再生利用と最終処分」関連で、参加していた。中国で初めて開催された「エコマテリアル」に関する国際会議として、プロジェクトメンバー以外にも日本からも、多数の参加があった。これは、その時の紀行文である。

1) 西安市内探訪

国際会議の途中、暇を見つけて、西安市内の名所・旧跡を訪れ、市井の庶民生活の状況を観察し、夜店の食事を楽しんだりした。まず、大雁塔は、宿泊していたホテルのグラン・メディア西安から近い大慈恩寺という仏教寺院の境内にあり、『大唐西域記』で有名な玄奘(三蔵法師)が、インドに赴いて持ち帰ったという仏典や仏像が所蔵されており、5階建てのレンガ造の塔である。中には、木造の部屋があり、木製の階段を通じて、上階まで登れるようになっていた。別に、小雁塔もあるそうであるが、近くではないので、訪れなかった。中央公園

は、西安の中心部にあり、広場と植栽が混在し、市民の憩いの場となっているようであった。夜店は、当時盛んであり、焼き鳥など、色々な食彩が並べられ、賑わいを見せていた。旧市街地を囲む城壁も残っていて、西南の城壁と門は、旧絹の道の起点となっていた。旧市街地の中は、東西南北が碁盤の目のようになっていたが、鼓楼や鐘楼が有名である。京城内部は、古い長安を彷彿させる街並みが連なっていたが、中華料理店とともに、近代的ビル建築もかなり見かけた。市内観光のあと、ホテル近くの界限にある土産店を訪れ、帰りに、水墨画の掛け軸とヒスイの玉杯を購入して持ち帰った。

2) 西安郊外探訪記

華清池は、玄宗皇帝が楊貴妃のために造営した離宮で、西安市街から東へ約 30 キロ行った郊外の驪山（りざん）のふもとにある有名な温泉池である。そこを訪れた。桃の花は、シーズン・オフだったが、ザクロの花を見かけた。大きな池の周りには、散策のためのいろいろな植栽があるようだ。

3) 兵馬俑探訪記

西安からかなり離れたところに、中国の最初の皇帝である秦の始皇帝陵があるが、そこを取り囲む形で、彼の崩御の殉職の代わりに作られた大量の土偶が埋葬されていたのが、兵馬俑である。19 世紀後半に発見されて、世界を驚かせ、中国の世界文化遺産となっている。そこを訪れた。当時、堂山昌夫教授夫妻も訪れていた。その規模も目を見張ったが、土偶とはいえ、等身大の多数の人間の形のものばかりでなく、馬、馬車、兵器の土偶もあった。その、種類の多さ、その精巧さは、人を驚かせるものであった。

あれから約 27 年が経過した。西安は、長安時代の旧京城を残しながら、東西に、スプロール状に、鉄筋コンクリート造（RC）高層建築が乱立する現代的都市に変貌を遂げているようである。ただ、旧京城内の美しい建造物や街並みは、中国の貴重な文化的世界遺産として残してほしいと願う次第である。

令和 3 年 1 月 14 日

短歌:長安に連なる西域を旅した隊商の思い新たなり絹の道

俳句:大雁塔仏の道は遠い彼方に

ヴェルサイユ宮殿等探訪記

パリの西部のコンコルド・ラファイエットという鉄筋コンクリート（RC）造の現代風のホテルに宿泊して2日目の午前、パリ近郊のヴェルサイユを訪れ、ブルボン朝第3代フランス王ルイ14世の絶対王政時代のバロック建築の典型と言われるヴェルサイユ宮殿を見学した。新・旧の建築の見事な対照とも言える。その日は、あいにく雨であったが、壮麗な宮殿と庭園を十分に鑑賞できた。宮殿自体は、3階建てで、東側に入り口を持つ「コの字型」の本殿の左右に2つの翼棟が繋がった構造をしている。1、2階部分が、“美術館”として、一般的に公開されている。王室礼拝堂や大居室、王妃の部屋、アポロンの部屋、ヴィーナスの部屋など、700近い部屋がある。その中で、鏡の間は、庭園に面する17の窓と、それに正対する壁に同じ数の鏡が並び、窓から入り込む光が反射するように設計されているようだ。天井には、ルイ14世の功績を示す絵画や、王家の紋章であるユリの花の装飾がある。諸外国の元首や特使との謁見や舞踏会の会場となり、以降ヨーロッパ各国の宮殿建築の模範となったようである。ヴェルサイユは、30年ぐらい前に、「材料科学から建設工学まで」に関する国際会議が開催され、旧建設省建築研究所時代の同僚の一人の柘田さんと一緒に訪れたこともあったが、その時とはまた別の新たな印象を持った。宮殿から南に延びる広大な庭園もすばらしいものであったが、日本の、自然と融合する様式と異なり、人工の装飾美を強調し、自然を威圧する様式のような。元々、ヴェルサイユ宮殿のモデルとなったのは、パリの南東にあるルイ14世の財務卿ニコラ・フーケの居城ヴォール・ヴィコンテ城である。20年前、「物質・エネルギー同時移動に関する日仏共同研究」のために、パリに10日間滞在したことがあったが、そのとき、雪景色のこの古城を訪れたことがあった。少し鄙びていたが、城の骨格と庭園および内部の装飾・家具・調度類など、目を見張るすばらしいものがあった印象が残っている。この城のすばらしさに嫉妬したルイ14世が、建築家ル・ヴォー、庭園技師ル・ノートルをスタッフとして、新たに、王家の勢威を示す意味も兼ねて作ったのが、ヴェルサイユ宮殿であるという。いずれにせよ、華美と豪勢の限りを尽くしたフランスのブルボン朝の王家と貴族の生活と社交のための宮殿であったようだ。

平成24年6月26日

俳句：ヴェルサイユ雨に煙る館かな

俳句：ヴェルサイユ華美と豪奢の館かな

あれから、10年が経過した。宮殿と庭園の美しい映像が、臉に焼き付いているようだ。

令和3年1月14日脱稿

俳句：薔薇の庭幾何学模様的人工美

短歌：遙かなる遠景を煙らせて華美につくりし人工美

主宰論説 16

2020 年を振り返って

今年も、喜怒哀楽いろいろなことがありました。

先ず、新型コロナウイルス禍が、世界的に猛威を振るい、今現在も、沈静化する気配もなく、今後どの様に推移するのか、固唾をのんで見守る事態です。改めて、この度の未曾有の新型コロナウイルス禍で、亡くなられた方々、感染された方々のお見舞いを申し上げますとともに、速やかな沈静化を願いたいと思います。

他方、何故か、この新たな伝染病が蔓延する中で、昨年、多発した地震、火事、風・水害、停電、土砂災害などの想定外の天変地異の自然災害・人災が、トルコ・ギリシア大地震など、世界的には多かったが、日本では台風被害や大地震の災害は、少なかったかもしれません。ですが、令和2年7月豪雨と命名された熊本の球磨川氾濫をもたらした豪雨、酷暑は、相変わらずですし、小規模の火災は、結構多かったようです。また、年の瀬が迫ってから、東北、北陸、山陰地方だけでなく、全国的に、2016年以来の大寒波と大雪の雪害に見舞われました。

『天災は、忘れた頃にやってくる』という寺田寅彦博士の名言もありますから、防災・減災対策は、忘れないようにしたいものです。亡くなられた方々の心からのご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様のお見舞いと、一日も早い復旧・復興をお祈り申し上げます。結果的には、伝染病と自然災害と経済の3つの同時克服が、迫られました。来年には、最良の方策で、解決の方向に向かうことを期待したいものです。

他方、外では、民族的紛争、宗教的争い、内戦・テロ、世界の覇権をめぐる争いは、絶えることがなかったようです。内では、政治的な灰色の霧および不透明問題、医療崩壊の危機、飲食店、観光業の休業・時間短縮による営業困難、鉄道・航空業界の経営悪化、労働環境の悪化など、悲しく、暗い話もありました。今年も、昭和・平成時代を支えた名人・偉人・面白人たちの多くが、長い二度と帰らぬ旅路に赴き、また、長年親しみ、世話にもなった先輩、知人、友人、後輩、世界的に有名な偉人に近い人等の訃報も続出し、悲しみに、襲われることもありました。気候変動の実効的な対策の不徹底をめぐる問題、大気・水質・土壌汚染、固体・液体・気体の廃棄物問題、生物多様性の激減など、人類の長年の諸活動による地球的な規模での問題が、人類ばかりでなく、生物全体の存続をも危うくする危険性も認識されるようになりました。可能な限り、的確な防災・減災対策や実効的な対応策を考える英知が必要であることが認識させられました。また、改めて、頂いた命を大切に、天命を全うすることの重要性も、考えさせられました。

私自身は、血行不良からのかなりの回復をできましたが、神経性障害による足・手の痛みや
ぶり返す腰痛などの体の不具合に悩まされながらも、リハビリテーションを続け、花鳥風月を
愛でながら、研究活動を続けました。いろいろな人々に助けられて、予定していた3つの学会
(マテリアルライフ学会、日本建築学会、日本建築仕上学会)のうちのマテリアルライフ学会
での研究発表を無事終えることもできました。ですが、新型コロナ肺炎ウイルス禍への配慮か
ら、他の2つは、中止およびオンライン形式の開催でした。当分、オンライン形式での学会研
究会が続くと考えられました。

今年も、終わりで、大みそかになります。静かな良い年末と希望と光の見える来年を迎えられ
ることを期待したいものです。今年の皆様のご厚情に感謝したいと思います。良いお年をお迎
えください。

令和2年12月31日 大晦日 福島敏夫

主宰論説 15

クエンカ市およびアランフェス探訪記

平成15年(2003年)スペインのマドリッド市で、「先端材料の処理と製造に関する国際会
議(THERMEC'2003)」の一環として、「エコマテリアル・シンポジウム」が開催され、「連
続繊維補強コンクリートの資源循環を志向した材料設計」というタイトルでの研究発表の
ために、参加した。

驚いたことに、科学技術振興調整費総合研究「材料のエコマテリアル化のための設計・評
価に関する研究」(平成5～9年度)(エコマテリアル・プロジェクト)と一緒に「複合材
料のエコマテリアル化」の研究をやっていた杉氏と松崎氏(今は故人)の両氏が、当国際会議
の「高分子系複合材料の溶媒溶出法によるリサイクル」に関するポスター・セッションがら
みで、スペインのマドリッド市にきていた。偶然にも、私の滞在していた「ヘスピラル・ゲ
タフェ・ホテル」で、明日スペインを離れるという前日の朝、奇遇にもホテルのフロントで
再会した。それで、これからレンタカーを利用して、マドリッド市近郊の観光をするから、
可能ならばおまえも加わらないかという誘いを受け、二つ返事で承諾し、一緒に、マドリッ
ド市近郊のクエンカ市とアランフェス市の探訪に加わることになった次第である。これは、
その時の紀行文である。

1) クエンカ市

最初に行ったクエンカ市は、現在は、スペインのある州の州都であるが、元々の旧市街地
は、山頂あるいは河川の断崖平野に開けた旧イスラムの城塞都市であったのが、キリスト教

徒の国土回復運動の一環とした攻略の結果として陥落し、キリスト教都市に転換したと言う歴史的背景を持つものである。その旧市街地は、日本ではとても見られない奇妙な山岳都市としての景観を有し、断崖絶壁に建てられた石造建築のベランダの部屋部分は、木造でできているが、乾燥のためその柱・梁部材は、珪化木に変化しており、およそ500年以上の風雪による劣化に耐えているらしい。乾燥は、劣化に対しては有利に働いている。これに対し、日本のように、高温・多湿であり、年間降水量が世界平均の2倍もある多雨地帯である日本のような温暖地帯では、よほど維持・保全を定期的にかまめに行わなければ、構造躯体は、とてもメンテナンス・フリーでは、100年は持たないじゃないかしらという印象を持った。気候・風土も、建造物の耐久性に大きな影響を持つようだ。

2) アランフェス市

次に、アランフェス市に向かった。この市は、J. ロドリゴの「アランフェス協奏曲」で有名なハプスブルグ・スペイン王家の離宮で有名であり、また、日曜日には、イチゴ列車が走るのでも有名である。この王宮は、フランスのベルサイユ宮殿ほどではないが、それに匹敵するほどの豪華絢爛さを誇っていた。しかし、面白いことに、「喫煙の間」というものがあったのと、ある女王のくつろぎの部屋に、日本の「イグサ」から作ったゴザのようなものが使われていたこと、「来賓用の応接間」に、イスラムの影響かと思われる真っ青な陶器の装飾があったのは、東西文化交流を思わせるものとして印象深かった。

令和2年12月29日脱稿

あれから、17年経過した。今もなお、その時の美しい絶景や街並みの情景が目に浮かぶようだ。クエンカの絶景は、現在、ユネスコによるスペインの世界遺産にもなっている。

俳句：

短歌：断崖にすぐ落ちそうな姿して劣化に耐える珪化木

俳句：王室にいぐさを見たり夏木立

北フランスのシャルトル・ノートルダム大聖堂見学記

北フランスの世界遺産の一つであるシャルトル・ノートルダム大聖堂を訪れた。その時の紀行文である。「フランスの穀倉」と言われるボーズ平野の中心にある古都シャルトルにあるロマネスク様式のこの大聖堂は、元々4世紀からの聖母マリア信仰の拠点となり、巡礼の地である。フランス最大の地下聖堂で有名である。たびたびの火事に見舞われ、13世紀初めに、ゴシック形式で再建されたようだ。マリア像のステンドグラスは、太陽の日差しを受けると、シャトルブルー（ラピスラズリ）のステンドグラスを通して射し込む淡い青い光が室内に満ちて、幻想的な空間を作っているようだ。ゴシック・ロマネスクの混合建築は、ヨーロッパ最高の建築と称されるようだ。ちなみに、ラピスラズリ (lapis lazuli) は、和名では瑠璃（るり）といい、青金石（ラズライト）を主成分とし、同グループの方ソーダ石・藍方石・黝方石など複数の鉱物が加わった類質同像の固溶体の半貴石である。

深い青色から藍色の宝石で、しばしば黄鉄鉱の粒を含んで夜空の様な輝きを持つ。エジプト、シュメール、バビロニアなどの古代から、宝石として、また顔料のウルトラマリンの原料として珍重されてきた。ラピスはラテン語で「石」(Lapis)、ラズリはペルシア語からアラビア語に入った "lazward" (ラズワルド: 天・空・青などの意でアジュールの語源) が起源で「群青の空の色」を意味している。石言葉は「尊厳・崇高」などで、ステンドグラス用としては、最適であるようだ。

平成 24 年 6 月 24 日

俳句：ラピ斯拉ズリ青の光の大聖堂

ステンドグラスから漏れ来る青い光は、人に、信仰心を育む源になっているようだ。だが、日頃、夜空の星を眺めながら、遠い空の果てに思いを巡らす感受性も、持ちたいものである。

令和 2 年 12 月 29 日脱稿

俳句：雪景色青の空は澄みわたる

主宰論説 1 4

クロネード・モネの庭園と邸宅の見学記

クロード・モネの庭園等を訪れた。その時の紀行文である。フランスの代表的な印象画家クロード・モネ（以下モネと略称する）の庭園と邸宅は、北フランスのノルマンディー地方のウール県のジヴェルニーというセーヌ川のほとりの村にある。そこを訪れて感心したのは、その広大な敷地の庭園と大邸宅である。庭園は、うまく川の水を利用し、いろいろな植物と花および池を配して、散策の際の自然の妙味を満喫できるようになっているように築園されているようだ。モネは、【睡蓮】の花の絵で有名だが、結構、バラの花の名園も見事だと思われた。北フランスの地方であるので、このような広大な庭園の敷地を確保できたと思われるが、庭園の整備と維持については、モネの並々ならぬ情熱を感じた。日本の回遊式庭園の影響もあったように思われた。モネの居住と画家としての活動を行った、庭園に隣接する、邸宅も訪れた。そこに陳列されていた一連の作品、家具、調度品の多さと多彩さには驚かされた。特に、日本の江戸時代の浮世絵のコレクションの多さには目を見張った。時代と国境を越えた日本とフランスの文化伝統の結びつきに、感じ入った次第である。

平成 24 年 6 月 23 日

俳句：紫陽花やフランス画への想いかな

令和 2 年 12 月 16 日

その後 10 年経った。日本でも、モネの庭園に似たものが、各地にあるようだ。東京の六

義園、高松の栗林公園、福岡の大濠公園など、山水式庭園とまではいかないが、人口の島を配した回遊式庭園は、日本的な散策の感覚と調和したものかと思われる。

俳句：散策に島を配した小道かな

都市火災

今度は、糸魚川市の都市火災のようですね。小さい頃、自分の家と小学校校舎が、火事で焼失し、隣の魚津市も、大部分が焼失してしまったことを悲しく思い出します。ですが、それにめげずに、生き抜いた竹馬の友、同級生等を、懐かしく思い出します。建築も、人を引きつける素晴らしい意匠性だけでなく、地震とともに、火事の災害の防止ということも忘れないでもらいたい。ですが、生物種の多様性喪失、砂漠化や風・水害の頻発、固体・液体・気体廃棄物の大量発生等の地球環境問題への対応も重要だと思います。ともすれば、嫌気がすることも多いけど、夢と希望を持って、やりたいものです。

平成 28 年 12 月 22 日

短歌：真夜中の空を赤く染め火事を知らせるサイレンの音

令和 2 年 12 月 16 日脱稿

梅と桃と桜

今年は、一昨年、昨年が続いて、寒い日が 2 月から 3 月上旬まで続いたが、その後ぽかぽか陽気もあって、3 月中旬からは、梅、桃、桜が、相次いで開花した。桜に至っては、例年より 1 週間ぐらい早い開花となり、久しぶりに春の花見を楽しんだところも多かったようだ。日本では、梅と桜を愛でることが多いが、中国の昔の長安(現在の西安)の都では、桃の花の方を愛でることが多かったといわれている。風土に応じた感受性の違いかもしれないと考えられる。ところで、これらの花が開花するには、一定期間低温に置かれる必要がある、その後の温度上昇の変化を外部環境からの信号としてとらえ、春を感じ取って、咲き出すらしい。開花のための生命プログラムがあるということだ。考えて見ると、生物には、生き抜くためのそのようなプログラムがあるらしい。遺伝子の中に組み込まれているのか、不思議な気がする。

平成 25 年 3 月 25 日

令和 2 年 12 月 16 日脱稿

今年は、新型コロナ肺炎ウイルス禍に振り回された。建築でも、空調と換気の両立方法が迫られたようである。されど、年の瀬になって、大寒波の襲来と大雪である。伝染病と自然災害と経済の同時克服は、なかなか難しいのかもしれないが、最良の方策を考えて、沈静化を願いたいものである。

主宰論説 1 3

モン・サンミッシェルの見学記

フランスの建築の世界遺産にもなっているモン・サンミッシェルを訪れた。その時の紀行文である。モン・サンミッシェルは、イギリス海峡と大西洋に挟まれた北フランスのブルターニュ地方のフランス西海岸、サン・マロ湾上に浮かぶ小島に築かれた修道院であり、大天使ミカエルの3度のお告げを受けて、ノルマンディー大司教が築いたものらしい。モン・サンミッシェルは「聖ミカエルの山」の意で、旧約聖書にその名が記される大天使ミカエルのフランス語読み由来するそうだ。北フランスの世界遺産の一つとして有名で、訪れる人も後を絶たない。今は、人口の橋でつながっているが、元々、最大干満差 15m以上という。このため、湾の南東部に位置する修道院が築かれた岩でできた小島は、かつては満ち潮の時には海に浮かび、引き潮の時には自然に現れる陸橋で陸と繋がっていたそうだ。満ち潮になると、沖合に 18km まで引いた潮が、猛烈な速度で押し寄せる。このためかつては多くの巡礼者が潮に飲まれて命を落としたといい、「モン・サンミッシェルに行くなら、遺書を置いて行け」という言い伝えがあったという。前日、フォーミュラー・ヴェールというホテルに宿泊することになったが、夕方、モン・サンミッシェルの遠景を眺めた。まさに奇巖城の趣で、よくこんなところに修道院が建てられたものだと、先人の情熱に敬意を表するとともに、その建設と日常生活も並大抵の苦勞でなかったろうとその労苦に感じ入った。このような場所に教会を築くためには、島の岩盤を囲む基礎部分が必要であり、2層に渡って建造物を設け、最上部の教会の層を支えるという3層構造になっているようだ。そのために、修道院建築の主要部はゴシック様式だが、内部はさまざまな中世の建築方式が混ざり合って構成されているようだ。教会堂は、フランク王国カロリング期の様式で、身廊はノルマン様式(11～12世紀)、百年戦争後の1421年に破壊されたロマネスク様式の内陣はフランボワイアン・ゴシック様式(15世紀半ば～16世紀初頭)として再建された。これら周囲を13世紀の重層構造の修道院建築と13～15世紀の軍事施設が取り囲んでいる。ゴシック・リヴァイヴァル建築の鐘楼と尖塔は1897年に完成し、その上に奉られた剣と秤を持つ黄金のミカエル像は彫刻家エマニュエル・フレミエによって製作されたようだ。深層部からは、岩山の上に幾層にもわたり建造され続けた建築遺構も残るそうだ。急な坂道の上下りで、腰痛の持病のある我が身には、少々応えたが、名物のオムレツを昼食で頂くこともでき、土産物も入手できた。我田引水であるが、来てみて本当に良かったと思った次第である。

平成 24 年 6 月 24 日

短歌：回廊を散策しながら修道僧瞑想しつつ何思うかな

令和 2 年 12 月 4 日脱稿

その後、10年経過した。聞くところによると、景観及び自然保護の観点から、島に連なる陸橋は、撤去されたそうだから、また、日本の北陸地方にある日本海側の親知らず・小知

らず海岸の場合と同じく、引き潮時に現れた砂地を急いで渡ることになるのであろうか。

短歌：

引き潮で行くは良いけど帰りは怖いそれでも行きたし巡礼者

山茶花と椿

山茶花と椿は、花の形は似ているが、生育状況も開花時期もかなり違うようである。どちらも、日本原産であるが、山茶花が秋から冬にかけて咲くが、椿は、冬から春にかけて咲く。山茶花は、生垣で集まって花をつけるのをよく見かけるが、椿は、公園などの地面に一本木として花をつける。乙戸南公園を散歩していて、椿の花が盛りであることに気づいた。春は、梅・桃・桜が観賞用に有名であるが、椿も、結構味わい深い。紅椿と桃椿の木が2本並んでいて、それぞれの花をたわわにつけていたが、根本には、落下椿が、びっしりと地面を覆っていた。もともと、「寒椿」といわれるように、椿は、2月の寒い時期に咲く花である。椿の色は、紅白だけかと思っていたが、桃色の椿もあるのかと思うと、感慨深い。日本の到るところで生息し、県花や市花になっている場合もあるようだ（ちなみに、松山市の市花は、椿である）。また、一般的には、一重咲きだけでなく、八重咲きのものもあることを知った。椿は、花びらひとつひとつでなく、花ごとばさりと落ちる。そのため、江戸時代、不吉な花とされ、武士の家では椿の木は植えなかったという。おそらく迷信で、結構武士の家でも植えられて、その美を鑑賞したものと思われる。同種の花である山茶花との見分けが難しいといわれるが、良く見れば、その違いが分かる。

平成 24 年 4 月 20 日

俳句：

くれないに地面を隠す椿かな

令和 2 年 12 月 6 日

いつもの乙戸南公園の周りの散歩中、この2～3日で、近くの民家の生垣の山茶花の花が満開になっていることを知った。見たのは、紅花だったが、白花もあるらしい。「たきび」の童謡にも出てくるが、この花が咲くということは、もう冬の到来であると気付く。

短歌：

山茶花のくれないの花も咲き誇る師走の風に吹かれつつ

主宰論説 1 1

腰痛・肩痛等の体の不具合とリハビリテーション

晩年になると、手・足・肩・腰などにいろいろな不具合が生じる。頸椎という首の部分で、神経が圧迫されると、神経系の情報伝達がうまくいかなくなり、末端神経系の機能低下と関連して、排泄機能の不具合や、手足のしびれや腰、肩、肘等の痛みが生じるようだ。整形手術により、かなり改善され、完全に無くなることもあるが、一部不具合が残ったり、ぶり返したりすることもある。末端神経系の不具合は、手の握力低下となって現れることもある。また、一度衰えた筋肉の回復を図るのも大変なこともあり、腰の筋肉を鍛えておかないと、腰痛のぶり返しや、歩行困難の源になることもある。体の不具合からの回復のために、腰痛体操や、全身体操や、定期的な散歩により、リハビリテーションに努める必要もある。心身の不具合から解放されて、夢と希望を実現し、天命を全うするためにも、リハビリテーションを継続的に行いたいものである。

短歌

年とりて体に残る不具合を散歩で治す自力再生

2020年11月17日

星と虹

星と虹は、人に、どのような思いを抱かせるだろうか？

まず、星であるが、見上げる人に、夢と希望に連なる色々な思いを抱かせる源にもなり、その向こうの世界への思いを巡らせるきっかけとなるようだ。シルクロードを旅した昔の隊商や、帆船で大海原を航海した昔の船乗りたちは、満天下にきらめく夜空の星を眺めるとき、そこにしばしの安らぎを見出し、次のオアシスまたは港を目指して旅立つ新たな力を得たことだろうか？また、雨上がりの空にくっきりと映える七色の虹は、どれほど少年・少女らを魅了し、「夢多きメルヘンの世界」の扉を開き、想像力と感性を育む源にもなってきたことだろうか？

古来、「光」は、生命に恵みを与え、希望の象徴ともなり、また、畏怖の対象となってきたようだ。科学技術の進歩により、その神秘のベールは、取り除かれ、その性質は明らかとなってきたが、精神的な思いの源として、「闇」との対比で論じられることも多いようである。注意力とみじみずしい感受性が必要な場合もあり、なかなか分かりにくいのが、星と虹は、花鳥風月と並んで、人の心の癒しの源になって欲しいものである。

俳句

星と虹眺めて思う紅木立

2020年11月17日

主宰論説 10

鳶と松

散歩の途中、雑木林の一角を通った。元々松林だったらしいが、開墾して栗林に模様替えし、3本の高く伸びた松の木だけが残っていた。見上げていたとき、鳶（：とび、カラスかと思われたが違うようだ）が、一本の松の木の頂部に飛び降りるのが目に入った。どうやら樹冠近傍に巣を作っているらしい。このような環境で巣を作るということに、何かうれしような悲しいような不思議な感じにとらわれた。ああ、鳥は、このような場所にでも住み着いて、たくましく生きるらしい。しばらくして飛び立っていったが、雛のえさを探しに行ったのだろうか？ 鳶のひなの無事な巣立ちを願いたいものである。

俳句：松の木にとびの巣を見たおぼろ春

平成24年4月19日

鳶と松（続）

久しぶりに、雑木林の近くを通った。かつての3本松は、完全になくなっていた。木食い虫にやられて枯れたらしく、切り倒されたようだ。鳶は、どこに行ったのだろうか？ かれこれ10年近くになる。時の流れかもしれない。

令和2年9月25日脱稿

俳句：とびは去り松もなくなる秋の暮れ

水戸の名所と博物館・美術館巡り

およそ約20年ぶりに、水戸の偕楽園を訪れた。幸い天気は快晴で、梅祭りの最中ということで、賑わいをみせていた。JRの企画で、臨時に偕楽園駅への臨時停車を設定し、アクセスの容易性も功を奏していたと思える。久しぶりに訪れた偕楽園は、梅の名所で、紅梅・白梅入り乱れて咲き乱れていた。ただ、菅原道真さんが、「東風吹かば匂いおこせよ梅の花主なしとて春をな忘れそ」と歌ったのと違い、梅の匂いは、いまひとつだった。偕楽園の一角に、徳川齊昭侯が築いた好文亭がある（好文は、梅の異名らしい。中国の晋（しん）の武帝の故事「文を好めば則ち梅開き、学を廃すれば則ち梅開かず」により、梅の異名を「好文木（こうぶんぼく）」といったことから命名されたようだ）。一昨年（2019年）の東日本大震災の時、壁が崩れるような被害があ

ったが、復旧されて、再度開亭されたようだ。木造三階建ての学舎である楽寿楼（らくじゅうろう）と徳川の婦人や女官らのくつろぎの場である平屋の奥御殿が連結した形になっている。楽寿楼の三階からは、千波湖や梅林が眺望できてすばらしかった。その後、徳川記念博物館を訪れた。水戸徳川家の系図やゆかりの品々が陳列されており、歴史を学び、楽しんだ。また、少し離れた水戸市内に、水戸近代美術館があり、岡倉天心、横山大観らの日本画家らの作品を楽しんだ。特に、横山大観の「生々流転」の絹本水墨画は、圧巻だった。分野は違うが、先人の情熱と偉大な業績に感じ入った次第である。

平成 25 年 2 月 22 日

俳句：梅開く薄桃色の花卉かな

生涯設計と寿命

自分で言い出したのだが、生涯設計という考え方がある。最近では「人と環境に優しい」環境調和型生涯設計に変わりつつある。もともと、建築材料・部材を媒介にして、要求される性能/機能を満足させながらも、環境に配慮しながら、生産、輸送、組立/建設、使用/維持・保全、解体、廃棄、リサイクルなどのライフサイクルでの環境負荷を低減する考え方だった。

しかし、いろいろな材料・部材、部品、製品、建造物の設計行為において、寿命あるいは耐用年数を考慮しながら、ライフサイクルでのコストや環境負荷と材料投入量を最小にして、最大の性能及びサービスを得るという考え方として、諸分野に浸透することになった。また、これまで、材料・部材・建造物の寿命評価・予測の話もやってきた。寿命にも、材料・部材の寿命ばかりでなく、人間、動・植物、地球、宇宙に関するものなどいろいろな寿命もあるが、気象予知、地震予知、火山噴火の予知などとともに、いかに寿命予測が難しいかが実感である。しかし、有限の寿命の中で、いかにして、人としての生き方を考え、実行するかをプログラムするのも、生涯設計である。少しでも、実効性向上と精緻化がなされることを期待したいものである。

令和 2 年 9 月 27 日

俳句：人として歩き続ける長い道

主宰論説 9

源三窟

ゴールデンウィークの後半、家族サービスの形で、那須高原の探訪を目的に、塩原温泉

に一泊した。その翌日に、【源三窟】という史跡の鍾乳洞を訪れた。源義経の副将であった源有綱が、義経追討の、後白河法皇の院宣が下ることにより、義経の異母兄の源頼朝から追われることになり、この洞窟に逃げ込んで、再起を期して、2年間も家来と三人で隠れ住んでいたらしい。それにしても、このような狭い肌寒い洞窟中で、2年間も良く生き続けられたということは、よほどの強い意志の支えがなければかなわないと思われた。人間は、生きるためには、ただのんびりした生活を満喫することもさることながら、ある程度、生きがいなしは目標というものが必要らしいとしきりに感じ入った。

平成 24 年 5 月 5 日

俳句：あなかしこ源の強い意志も潰えたり

夢

今日不思議な夢を見た。昔大学院時代に、光物性の研究の一環として、硫化亜鉛中のテルル等電子トラップ (ZnS:Te) の発光過程のメカニズムの究明を行っていた。それが今になって認められて、JSDR という研究所(夢なので実際に存在するのか定かでない)で、真空紫外線領域での光物性研究という大プロジェクトで、レーザーと高性能分光装置を使った半導体の研究を復活させる要請を受けて、昔の助手の方と一緒に携わることになった夢である。もうかれこれ 35 年以上昔の話に関連した夢をみるとは驚きである。まだ未練があるせいか？または今になって認められることを妄執しているのか？ 夢は、時空を超えたものであるというが、考えてみると不思議である。

夢を考えると、楽しく、良いこともあるが、最近、昔親しんだ恩師、先輩、同級生、後輩らが、一人、二人と亡くなっていくつつを顧みると、つつの夢や希望と違い、睡眠時の夢は、過去の思い出に関連したものが多いうだと気づく。懐古趣味のなせることかなとふと思う。

平成 24 年 4 月 30 日

俳句：夢枕うつつ幻楽しみぬ

令和 2 年 9 月 26 日脱稿

短歌：夢の中時と空間乗り越えて自由に遊ぶ蝶々かな

夢 (2)

今日再び不思議な夢を見た。昔大学院時代に、光物性の研究の一環として、II-VI 化合物半導体におけるドナー・アクセプター対による吸収端発光過程のメカニズムの究明を行っていた。その中で、ZnS: Cu, Al による明るい緑色発光の発光ダイオードと、ZnS, ZnSe による赤及び青色の発光ダイオードを組み合わせて、光の三原色を実現させるために、実験研究をやっている夢である。もうかれこれ 45 年以上昔の話に関連した夢をみるとは驚きである。つつには、もう、建築材料等に関連した別の分野で研究をしているので、二度と、半導体の光物性の研究に戻ることはないと思うけど、今、新しい形で、高分子材料

の光劣化過程の可視化やコンクリートの中性化の可視化という形で、光と関連しているようだ。夢は、時空を超えて見るというが、二度も、昔の光物性時代に関連した夢を見るとは、考えてみると不思議この上ないことである。

令和2年9月26日

俳句：夢の夢目覚めて知るは風の音

主宰論説 8

定年の区切りと再出発

65才の定年になり、10年務めた北九州市立大学を退職し、土浦の乙戸南の自宅に戻ってから1年半になる。近くの乙戸南公園や稲荷公園や第3公園の周りを30分ほど散歩しながら、腰痛等の持病に伴う体調の不具合の回復を図っている。その傍ら、囲碁、クロスワード・パズル、数独パズル、グランドゴルフなどを楽しみながら、セカンドライフおよびサードライフを模索している。悠々自適と思ったが、2、3やり残したかなと思われることもあり、まだまだがんばってみようと思ひ、自宅を基に、福島建築環境材料研究所2を勝手に作り、再出発を試みている。ホームページ (<https://fukushima-institute.net/index.html>) を立ち上げて、情報発信と啓蒙に努めることにした。いろいろな学・協会は退会しないで会員を続けて、諸分野の研究情報を得ている。6月の末、定年退職の区切りと女房孝行を兼ねて、5泊8日の行程で、フランスの建築の世界遺産巡りに行って来た。その紀行文や印象に残った美しい建築群や庭園の映像及び下手な短歌、俳句を含めて、科学者の心と文筆の才能を併せ持っていたという寺田寅彦さんにあやかりたいと思ひ、日々気がついたことを随筆にまとめることにした。今年は、再度の政権交替もあり、新たな未来を指向しないといけないと思ひながら、過去の歴史も踏まえて、如何にして、持続可能な建築・都市・社会の基礎としての環境調和型建築材料・部材・建造物のあり方を考え、光、水、二酸化炭素と関連させて、色々な材料・部材・建造物の劣化の可視化と寿命評価・予測を考えるかという課題に取り組みたいと思っている。

平成24年12月17日

短歌：木枯らしが吹き抜けてゆき枯れ落ち葉乱れ飛び舞う散歩道かな

殺生石

那須岳の丘陵が湯本温泉街にせまる斜面の湯川に沿って、殺生石というものがあるが、そこを訪れた。何でも、九尾の狐の化身した大きな岩が、今でも閉じ込められたことに恨みを抱き

ながら毒気を放ち、その近くでは、動・植物も昆虫も生息できないということであるらしい。本当は、石が毒気の源でなく、湯川で毒性の硫化水素（H₂S）が発生するのが原因であるようだ。昔から、狐や狸が化身して人を化かすと言われていたが、狐や狸にしてみれば、はなはだ迷惑な話であると思われる。何故、この2種類の動物のみが化身するという言われができたのだろうか？ 偏見と誤解がもたらす悪しき影響は、古今東西枚挙にいとまがない。不透明なことの多い当節、特に、自ら考えて、本物と偽物の見分けをする眼力と判断力を養い、事の本質を見極める発想が必要なかもしれないと感じ入った。

平成24年5月5日

俳句：けだものの化身の言われも人の技

◎青春時代に作って、頭にしまい込んでいたが、晩年になり、ふと思い出して、文章にまとめ直した詩3篇：

・わが故郷黒部を称える詩一篇：

【望郷】

南方に立山連峰の雄姿を仰ぎ、北方に佐渡に連なる日本海の荒海を望む。

流れ下るは、天下の暴れ竜黒部川。

遠く十字峡に源を発し、溢れる奔流となり、峡谷を走り抜ける。

その支流48ヶ瀬となり、豊かなる黒部扇状地を形成せり。

春は、桜木わが世を唄い、近隣の丘陵花一色となる。

夏は、荒海鏡のごとく澄み渡り、遠く能登半島を眺望する。

秋は、紅葉一色となり、あまたの海の幸、山の幸が、宴席を賑わす。

冬は、あたり一面銀世界となり、北国の太陽、人の心を幻惑する。

黒部は、これ山紫水明の地、いかで蕉翁この地を唄わざるか。

・大宰府の遺跡を眺めながら思いを述べた詩一篇：

【追想】

水城北郭に横たわり、清川筑紫野を廻る。

深草の中、いずれの地かこれなる。

大宰府は要害の地、かつての隆盛誰か知らん。

日暮れて、冷気山道を廻るとき、
官公への思い、人をして憂えせしめるなり。

・博士論文の序文の中で書いた学問と葛藤に関する詩一篇：

【寒月】

寒月煌煌として夜空を照らし、万物深き眠りに落ちる。
清澄なること、これ湖水を見るがごとく、
静穏なること、これ深山に踏み入るがごとし。
一人草舎に座して天倫を論じ、寒風吹き抜ける山徑に思いを巡らす。
慄然として天空を仰げば、寒月いよいよ青みを増し、正に、わが心に相和するがごとし。

主宰論説 7

燕と雀

今年も、つばめが渡ってきて飛び交うのを見かけるようになった。ところが、昨年と同じく、近くのコンビニエンスストアの監視灯の上に巣を作っているのを見かけたのは、驚きである。昔は、燕の巣は、民家の軒先と決まっていたのであるが、昨今、そのような人工物に巣を作るのが気に入っているものと思われる。近くには乙戸川の流れがあり、その一角だけは、住宅地に似合わず水田が可能であり、巣を作るための泥、わら、木枝など収集に事欠かないらしい。ところで、燕は渡り鳥であり、やがては南の方に帰ってしまう。乙戸南公園でよく見かける雀は、留鳥であり、年がら年中近くにいるが、雀の巣はどこにあるのか、見当もつかない。燕と雀、どちらも、自分の生き方に合わせて、巣を作ると言うことらしいが、考えてみると不思議な対比である。

平成 24 年 5 月 15 日

俳句：五月晴れ鳥に見たり生きる知恵

燕と雀(その 2)

8月から9月に月が変わった。夏から秋への季節の変わりである。それとともに、燕がいなくなり、雀が頻繁に飛び交うようになった。稲穂がたわわに実をつけた水田や電線で、雀が群をなしている。燕も雀も住宅地でよく見かける鳥であるが、活動の時期の交代があるようだ。5月から8月までは、燕の独擅場であった。水田でも電線でも、見かけるのは燕ばかり。8月半ば頃、近くのコンビニエンスストアの監視カメラの上に燕が作った巣には、雛を三羽見かけた。どうやら子育てを終え、南の方面に戻っていったようだ。それとともに雀の活動が目立つようになった。燕が渡り鳥、雀は留鳥であることを改めて、実感する次第である。

平成24年9月5日

俳句：燕去り雀の天下稲穂かな

燕の再来

燕が、南から渡ってきたらしい。今年は、春は名のみで、殊更に寒い日々が続いていたが、昨年より1ヶ月ぐらい早い再来である。相変わらず、近くのコンビニエンスストアの軒先の監視灯の上に巣を作ったらしい。雌雄の燕のつがいが、雛燕に、交互に餌をはこんでいるのが見られるようになった。人間界の諸事の異変や天変地異に関わらず、生来の本能を続けているというのは驚きである。燕よ、地球に生息した愛らしい鳥として、未長く生物種を続けて欲しいと思う次第である。

平成25年4月5日

俳句：渡り鳥今年も元気燕かな

主宰論説6

小石川散策

久しぶりに東京に出かけて、本郷から小石川一丁目、柳町を抜けて、伝通院を訪れてみ

た。学部学生の3~4年生の頃、近くにあった(財)加越能育英社の明倫学館という学生寮で過ごしたので、その界隈が今どうなっているのかを確かめるとともに、徳川家康の孫娘の千姫の墓があるので有名な伝通院を訪れ、しばし考えに耽った。どうやら、徳川家康の実母の於大の方のものも含めて、徳川家の女の方々の菩提寺になっているらしいことがわかった。

連休のはじめで、思いの外、暑い日であったが、連休でわざわざ混雑な場所に行かないで、このような閑静な場所を散策するのも、一興でないかと思った。

平成24年4月28日

俳句：運命に翻弄された乙女かな

秋の味覚

秋の味覚というと、色々なものがある。まず、秋の魚で思い浮かべるのは、秋刀魚である。昔から、秋の味覚の中で、第一に唱えられていた大衆魚である。近年は、生息領域が変わったのか、乱獲がたたったのか、中国、台湾、韓国など、今まで食することもなかった近隣の他の諸国も秋刀魚の味に目覚めて漁獲するようになったためか、日本市場に回る秋刀魚の量は、かなり減っているようだ。それでも、秋刀魚が一番だ。

次いで、果物としては柿である。柿も、富有柿などの甘柿の他に、富士柿のような渋柿、あるいは、焼酎などを使って渋を抜いた合わせ柿もあり、結構、その種類も多いようだ。「柿食えば、鐘が鳴るなり法隆寺」と正岡子規が謳ったが、御所柿という奈良県（御所）（ごぜ）市原産の完全甘柿だったらしい。

秋のきのこととしては、古来、松茸が珍重される。見た目と香りは、松茸が一番だが、本当は、味は、「しめじ」が一番らしい。人間の5感のうちの視覚および嗅覚と味覚の違いかな。松茸も、取れにくくて、高価になり、滅多に味わうことができなくなってきたのは、少しさみしい感がする。他方、秋の野山の収穫の果物として、栗もあるが、「あけび」も、結構味が良いようである。

◎令和元年9月15日

俳句：松茸の匂いなつかし秋の暮れ

百花繚乱

昨年の東日本大震災や原発事故および相次いで起きた風・水害で、日本は災害に見舞われやすいということを改めて思い知らされ、また、これまでの価値観の変更も免れなかつ

た。今年の冬は、例年になく思いの外寒く、日本海側の東北・北陸・山陰地方では、大雪に見舞われ、日本各地で春の訪れも遅かったようだ。しかし、4月30日、5月1日になり、一転してぽかぽか陽気になり、いろいろな花が一斉に開花して咲き乱れ、さながら百花繚乱の様相であった。ざっと列挙しても、レンギョウ、山吹、紫木蓮などの灌木の花、また、道端では、タンポポ、ヒナゲシ、菜の花などの花が咲いていた。春爛漫の感がした。東北地方では、桜が、遅咲きながら満開になっているらしい。植物は、季節がくれば開花し、毎年、生命の息吹を発露するということは、素晴らしいことではないかと思う。百花繚乱というのは、本来、いろいろの花が咲き乱れることを意味するが、転じて、美しい女性が、それぞれ、個性を発揮しながら、活躍すること、優れた人物が多く出て、立派な業績が一時期にたくさん現れることを意味するらしい。日本、地球の再生に向けて、期待したいものだと思う。

平成24年5月1日

俳句：輝ける命の息吹花の春

主宰論説5

お金と名誉と生涯

多くの人は、生きる上で、生活水準の向上を求めて、ある程度のお金が欲しいだろうし、世の中での尊敬と生きる充実感を求めて、社会的地位や名誉を求める。これは、ある程度、至極当然だろうと思われる。「仰げば尊し」という卒業唱歌の中にも謳われているように、「身を立て名をあげる」というのは、戦前・戦後を通じて、これまでの教育目標の一環であり、社

会的目標でもあったように思われる。けれども、ここきて、これらの生き方は、果たして、人間に幸せと心の安らぎをもたらしたのか、少々疑念を感じざるを得ない。

最近でも、事業に成功し、あるいはマネーゲームにより、大金持ちになり、名をはせた人は多い。実名を挙げるのは、はばかれるが、スーパーマーケットのオーナー、鉄道を主とする不動産業の社長、情報産業による時代の寵児となった青年実業家、マネーゲームのための投資ファンドのオルガナイザー、政権交代の立役者となり、得意満面のとある政治家達など、時代の流れに乗じて一大財を作り、世俗的栄達を遂げた人達は、ちょっと考えても、枚挙にいとまがない。けれど、これらの人たちが、生涯その金の栄光を持ち得たわけではないのが、マスコミ等で報じられるとおりである。また、「立身出世」により人身位を極め、世俗的栄達を遂げた人も、古今東西、王侯、貴族、政治家など、生涯その栄光を全うできた人は少ないようだ。逆に、ゴッホさんのように、生前不遇のまま生涯を終え、死後にその業績の評価がうなぎのぼりに高まり、名声を博する場合もある。もっとも、ゴッホさん自身は、亡くなっているから、自分が有名になっていることは知るよしもないだろうが。中国史、西アジア・中央アジア史や、ヨーロッパ史を賑わすように、英雄が一代で築いた大帝国も、三代目で滅びた例は、世界史上多い。人生には、大波小波に見舞われ、直線的な平坦なコースばかりではないことが多い。迂回する道の方が早く目的地に着くことだってある。お金と名誉と安楽な生涯は、必ずしも、全うできる人は少ないように思われる。そうすると、太く短くではなく、ある程度、細く長く、自分の生きたい生き方を全うできる人の方が、幸せなのかもしれない。才能があり、最後まで、充実ある人生を生き抜ける人は幸せだろう。学者・研究者、芸術家、作家、俳優などの生き様の評価ももっとあってしかるべきではないかと考える。昨今、陰惨ないじめ問題など、教育のあり方の見直しも問われる中で、やたらと知識を植え付けるのではなく、もう少し、生徒の個性と多様な生き方を重んじるような教育であるべきなのではないだろうか。自ら考えて問題を見つけ、それを解決する能力を養わせること、自ら考えて、本物と偽物を見抜く眼力・判断力を身につけさせるのが、真の教育ではないかとふと考える次第である。

平成 24 年 7 月 10 日

短歌：天の川喜び悲しみ数あれど天寿を願う人の道かな

元素の周期律表と資源循環

ものを成り立たせているもとの性質をもつおもとの単位が元素である。周期律表は、すべての元素が一定の規則により整然と並べられた表であり、多くの元素が周期的に同じような化学的特性を示す。また、化学的特性の多くは、各元素の原子の内部電子構造の最外殻の電子配置を反映するものであることが今日一般的に認められている。“すべての物質は、土、空気、火、水の4元素からなる”という4元素説にみられるギリシアの自然哲学者らの想念的な考察とは異なり、具体的かつ実証的にひとつひとつ元素が発見されていく歴史は、科学技術発展の歴史と軌を一にする。その歴史の中で、元素の性質には何らかの規則性があるのではないかという考えに基づいて、メンデレーエフ (MENDELEEV, D. I.) の周期律表の発見を生んだ。今度は、その周期律表を基に、天然のものも人工のものも含めて、多くの新しい元素が発見された。2003年では、人工元素を含めて、118の元素があることが知られていた。2010年2月ドイツの重イオン研究所で112番目の新元素が発見され、コペルニシウム (Cn) と命名された：日本化学会メール通信 2010年2月25日)。2018年には、日本の理化学研究所で、113番元素が発見され、ニホニウムと命名された。第7周期までの元素がすべて発見されたことになる。メンデレーエフが、当時、周期律表のまだ発見されていない部分をあけておき、今後発見される元素の性質を予見し、その後、新たに発見された元素が、その通りの性質を持っていたという。メンデレーエフの遠見と先見性は、たいしたものだったと思われる。化石資源、鉱物資源、生物資源、水資源あるいは大気資源など、多くの資源は、この元素の組み合わせから成り立っており、地球に豊富に存在する元素から成り立っている資源や、例え豊富ではなくても循環性に優れた資源は、枯渇するまでに時間がかかり、安定供給性に優れたものと考えることができる。たとえば、建築分野での基幹構造材料の一つである鉄鋼は、一番安定した元素である鉄 (Fe) を主体とし、炭素 (C) が存在することで、その硬さの源になるが、各種の稀有金属元素 (銅 (Cu)、クロム (Cr)、ニッケル (Ni)、モリブデン (Mo) など) を合金元素として含む。水和したコンクリートは、ケイ素 (Si)、カルシウム (Ca)、アルミニウム (Al)、酸素 (O)、水素 (H) から成り立ち、木は、炭素 (C)、水素 (H)、酸素 (O) から成り立つ。また、動・植物の死骸が炭化した石油・石炭の化石資源は、硫黄 (S) を一部不純物として含むものの、炭素 (C) と水素 (H) からなる炭化水素 ($-(CH)_n-$) である。我々は、生きている限り、地球 (あるいは宇宙からも) の資源とエネルギーを消費しながら生活する。また、我々の人体そのものも、その主要な元素組成は、宇宙および海の組成と類似している。そういう状況を考

えるとき、元素の周期律表と数十億年以上の気の遠くなる様な過程を経て形成された地球の元素組成とそれに関わる資源の状況に思いをはせてみるの

も、重要であるし、また、必要でもないかと考えられる。

平成 24 年 11 月 5 日初稿

令和元年 11 月 25 日脱稿

短歌：周期律宇宙の元素顧みて資源生命その由来を知らん

主宰論説 4

筑波山

近くのコンビニエンス・ストアの正面に、紫峰（しほう）と呼ばれる筑波山がくっきり見える。西側の男体山と東側の女体山が、双方の峰としてみえる。実際には、女体山の方が若干高いはずだが、ここからは、同じぐらいの高さに見えるようだ。筑波山は、北関東の霊峰として、古来いろいろな人の来訪を招き、筑波山神社は、今も、年始の礼拝の対象となっている。「つくばねの峰より流れる男女ノ川恋ぞ積もりて淵となりぬる」という百人一首の歌がある。男女ノ川は、女体山と男体山の峰から流れる川で、桜川に合流して、土浦の霞ヶ浦に注いでいる。富士山と対比して「西の富士、東の筑波」と称される。富士山が、成層火山としてのその美しい姿で人々を魅了し続けてきたが、時々、大噴火で災禍ももたらし、自然の猛威も知らしめる山だった。筑波山は、北関東の霊峰として、自然災害の例も少なく、山岳信仰の対象となってきたようだ。

平成 25 年 1 月 5 日(土)

俳句：つくばねの霊峰仰ぐ冬景色

寿命と生命力

本日 67 歳になった。小・中学校の同級生や、竹馬の友からも、高校の同級生からも、大学の教養学部同級生からも、工学部の同級生からも、大学院の同級生からも、「おまえは、勉強が少しはできるかもしれないが、生き方が下手くそだから、早死しないように気をつけろ」というような言われ方をされながら、67 歳まで生き抜けたのは、考えてみると

不思議な気がする。親族も、かなりの程度癌で亡くなっているから、自分が、癌で早死に
しなかったのは、親から受け継いだ生命力が強く、生来の寿命が少し長かったものと感謝
すべきかもしれない。世界史に名を残すような偉人は、「この道一筋の生き方」を全うす
ることにより、人類への貢献の金字塔を打ち立てたのかもしれない。しかし、私のような
凡人や世間一般の人は、必ずしも一つの生き方を全うできず、大波小波に揺られながら、
かなりの程度、ジグザグコースを歩まざるを得ない。直線的な白黒人生を送る人は稀であ
る。それでも、寿命というものを考えてみると、寿命というものは、ある程度それぞれそ
れの人で固有のものが決まっているのかもしれないと思うこともある。「天才は夭折す
る」と言われるように、才能ある人が、生命力に恵まれず、惜しまれつつ早死する人もい
るし、天寿を全うして、90歳近くまで生きて、すばらしい業績を残す人もいる。人が生
き抜くためには、ある程度、情熱と信念がいると言われるが、必ずしもそれだけでなく、
心身の健康と環境の面もあるのかもしれない。知力、体力、学力のほかに、生命力という
ものも、人の生きざまにおける重要な資質と考えられる。また、人間も動・植物も、生を
受けて、十分に生命を謳歌し、生命力が高揚する壮年期を経た後は、いずれは死して土及
び海に戻ると言う自然の哲理を免れないように、建築・土木の人工の建造物も、長年経つ
うちには、いろいろな風化・劣化をし、あるいは、地震、火事、風・水害などの自然災害
を受けて倒壊し、元の黙阿弥の状態に戻ると言う宿命を免れない。それでも、劣化のメカ
ニズムをよく理解し、工学的な適当な配慮をすれば、医者 of 医療行為にも似て、天寿を全
うさせることも十分可能であるが、ある程度は、気候・風土とも関連してくる。材料・部
材の寿命、人工建造物の寿命、文明の利器や製品の寿命、動・植物の寿命、人間の寿命、
地球の寿命、宇宙の寿命など、寿命にもいろいろある。長らく材料・部材およびシステム
の耐久性の研究の一環として、寿命予測もやってきたが、寿命予測が如何に難しいかが実
感である。それでも、命ある限り、体が動く限り、頭が働く限りは、続けたいと思う次第
である。

平成 24 年 6 月 5 日

主宰論説 3

花鳥風月と星・虹

最近、改めて、花鳥風月と星・虹を愛でる感受性を持ち続ける感性の大切さを感慨深く
考える。松尾芭蕉翁が、「ついに無能・無才にて、この道一筋に通ずる」という思いとと

もに、風雅の世界に生き、「正風俳句」の創成と振興とに生涯を捧げたというのは、分野は違っても、人の生き方として、相通じるものもあるように考えられる。人生は、直線的な平坦コースばかりでなく、でこぼこで、ぬかるみ、泥んこに見舞われ、生きているのも嫌気がするコースであることも多い。それでも、花鳥風月を愛で、生きている回りの環境、季節の移り代わり、あるいは、遠い宇宙に思いを巡らすのも悪くはない。人としての気持ちの余裕を失わないで、天命を全うする術を考えるのも、大切かもしれない。

令和元年 11 月 5 日

俳句：ムスカリの青い花も野辺の中

夏の風物

8月の盛夏の季節となった。今年も猛暑に近い日々が続いている。昔から夏の風物と言われるものは、いろいろある。先ずは、夏の暑さを忘れ、涼風を楽しむ風鈴である。風鈴は、南部鉄でできていたと思われる。軒先に取り付けられて、風に応じて、風流な音を楽しませてくれたことが、懐かしく思い出される。最近では、空調設備が普及したせいとか、とんと一般の住宅の軒先を飾ることがなくなったのは、少し寂しい気がする。機能性の追求ばかりでなく、自然と融合した風流としての日本伝統の夏の風物として、もう一回復活を願いたいものである。そういえば、松尾芭蕉が、「静かきや岩にしみいる蟬の声」と謳ったように、蟬の鳴き声も夏の風物である。しかし、この乙戸南の住宅界隈では、それほど蟬の声が聞こえない。10年間滞在した北九州の教員宿舎では、裏山があったせいとか、うるさいほど蟬の声が聞こえたのに。乙戸南公園まで行けば、少しは聞こえるようだ。通常、蟬の声も、最初は、アブラゼミ、次いでニイニイゼミ、夏の終わりはツクツクボウシというように、移り変わりがある。北九州では、ヒグラシやクマゼミの声もあったようだ。今日、アブラゼミの死骸を家の玄関先でみつけた。話によると、アブラゼミは、9年近く地中で過ごし、夏の一週間の短い時間を精一杯鳴き暮らして生涯を終えるそうである。たかが蟬と言うなかれ、精一杯生きたことを称えたい気がする。もう一つの夏の風物はトンボである。昔は、オニヤンマ、ギンヤンマが住宅地の界隈を往来し、川縁や池の端では、シオカラトンボもよく見かけた。ここではほとんど見かけなくなってしまった。蜻蛉もほとんどみかけない。まして、夏を彩る蛍の光など望むべくもない。九州では、遠賀川の支流で蛍が乱舞する場所もあったように記憶している。生物の生息のための基盤が失われたせいだと思われるが、少し寂しい気もする。その反面少し驚きをもって見ることもある。サルスベリの木は、近くの民家などで栽植されているのをよく見かけるが、約1ヶ月以上夏から秋の初めまでずっと薄い紅色の花が咲き続けるようだ。そのために百日紅という異名がある。夏の多くの生物のはかなさと比較すると、驚くほど長命のようだ。生物

の寿命は、どのように決まっているのだろうかと考える次第である。

平成 12 年 8 月 15 日

短歌：限りある命の限り生き抜いてあなかしこ土に帰るは大往生かな

主宰論説 2

自然災害と物質文明

寺田寅彦博士が、【天災は、忘れたところにやってくる】という名言を、その随筆で述べておられる。最近頻発している想定外の天変地異を考えると、これまで考えたこともない時・場所・規模で起こることも多くなってくると考えられる。怖いものとして、「地震、雷、火事、おやじ」と並び称されてきた。しかし、最近、風水害や、竜巻なども、想定する必要があり、日本は、自然災害とつきあっていく必要があることを思い知る次第である。また、2011年3月11日に発生した東日本大震災を契機として、自然の恵みと猛威が認識される中で、我々が享受してきた科学技術とそれに基づく欧米型の大量生産・大量消費・大量廃棄型物質文明の大きな見直しが必要になっている。東日本大震災や南紀・伊豆大島の台風被害および2016年4月14～16日の熊本・大分大地震、想定外の台風10号による東北・北海道の風・水害、2018年の大阪北部地震、西日本の豪雨・酷暑、台風21号による想定外の風・水害、想定外の北海道胆振（いぶり）東部地震、2019年の夏の酷暑と大雨、台風15号及び19号による風・水害、洪水、土砂災害など、最近の想定外の天変地異等の自然災害への対応が緊急性を増している。しかし、長期的視野に立つとき、持続可能性と関連した環境調和性の評価と技術開発も必要かつ不可欠と考えられる。人類の長年の諸活動の結果、地球規模での浄化能力・自浄能力を超えた固体・液体・気体廃棄物の大量発生事態を、抜本的に解決する方策を考え、持続可能な道を模索する英知が問われている。

©令和元年11月22日脱稿

細菌等と伝染病

新型コロナ肺炎ウイルス感染の世界的拡大が、自然災害とは別の意味で、人類の存続に対する脅威となっているようだ。もともと、中国の湖北省武漢市で、コウモリが媒介となった新しいウイルスが人に感染したのが始まりとされるが、人から人への感染で、急速に拡大した。これまでにない新たなウイルスで、37.5℃を越える発熱とせきと呼吸困難を伴うとされる。対応する治療法も見つからないまま拡大し、死者もでるようになった。世界各国で、感染拡大防止のための人の集まりと移動制限措置に関する緊急事態宣言および非常事態宣言も出された。人類の英知を結集して、実効的な対応策に基づいて、収束し、沈静化することが、期待される。

歴史を紐解いて見ると、細菌等による伝染病と人類の戦いは、数多い。古くは、中世のヨーロッパで、ネズミを媒介とするペスト菌の伝染で、人口の3分の1が、亡くなったとされる。また、インカ帝国が滅亡したのは、スペイン人が持ち込んだ天然痘の感染拡大だったとされる。近世・現代では、第一次世界大戦の時のスペイン風邪の伝染拡大がある。コレラ菌など、光学顕微鏡で見つかる通常の細菌と違い、ウイルスは、更に小さく、通常は目に見えない。このウイルスは、新たに、人類の存続に警鐘を鳴らしている。早めに沈静化を願いたい。

令和2年3月21日

主宰論説 1

(2019年を振り返って) (その1)

平成31年から令和元年に年号が変わり、新しい時代の始まりを感じさせることもありました。今年も、喜怒哀楽いろいろなことがありました。

先ず、地震、火事、風・水害、停電、土砂災害などの想定外の天変地異の自然災害・人災が、多発しました。亡くなられた方々の心からのご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様のお見舞いと、一日も早い復旧・復興をお祈り申し上げます。

他方、外では、民族的紛争、宗教的争い、内戦・テロ、世界の覇権をめぐる争い、内では、いろいろな殺りく事件、学校・家庭・会社内等でのいじめ問題、政治的な黒い霧および不透明問題、企業等のイメージを損なうデータの漏洩・消失問題、芸能界・スポーツ界等でのセクハラ・パワハラおよび薬物事件、科学技術等の信頼性を喪失させる研究不正

事件など、悲しく、暗い話もありました。昭和・平成時代を支えた名人・偉人・面白人が、長い二度と帰らぬ旅路に赴きました。また、長年親しみ、世話にもなった先輩、知人、友人、後輩、世界的に有名な偉人に近い人等の訃報も続出し、悲しみに、襲われることもありました。温暖化の是非と対策をめぐる問題、大気・水質・土壌汚染、廃棄物問題、野生生物の激減と有害生物の広域移動など、人類の長年の諸活動による地球的な規模での問題が、人類ばかりでなく、生物全体の存続をも危うくする危険性も認識されるようになりました。可能な限り、的確な防災・減災対策や実効的な対応策を考える英知が必要であることが認識させられました。また、改めて、頂いた命を大切に、天命を全うすることの重要性も、考えさせられました。

ですが、象徴天皇・皇后の速やかな交代、文化界・スポーツ界でのいろいろな快挙、科学界でのすばらしい発見や創造、実業界での新しいイノベーション（人工知能、ビッグデータ、ロボット、IOT、可視化など）により、今後に向けての明るい話題もありました。オリンピック・パラリンピックの開催が近づく中で、欧米文化もすばらしいけど、花鳥風月やわび・さび等に関する感受性等に根差す、日本文化のすばらしさも見直されるようになりました。人と生物と自然との共存・共栄と宇宙船地球号の大切さ、世界遺産の保存と存続と世代的継承、地域・地方社会の再生と活性化に向けての動きなど、夢と希望と情熱と感性と努力と継続を感じさせる話も結構多かったと思います。

私自身は、ぶり返す腰痛・肩痛や新たに見舞われた動脈硬化や神経性障害による足・手の痛みや機能低下などの体の不具合に悩まされながらも、リハビリテーションに励みました。血行不良等による右足の不具合による歩行困難で、車いす対応での活動を余儀なくされながらも、花鳥風月を愛でながら、研究活動を続け、いろいろな人々に助けられて、予定していた3つの学会（マテリアルライフ学会、日本建築学会、日本建築仕上学会）での研究発表を無事終えることもできました。受賞（マテリアルライフ学会30周年功労賞）とともに、無事3つの研究発表を終えられたことは、大きな喜びとなりました。

今年も、後10日余りを残すだけですが、良い年末を祈願するとともに、今年の皆様のご厚情に感謝したいと思います。

(2019年を振り返って) (その2)

激動の2019年も、まもなく、終わろうとしています。

忘れていたかも知れませんが、劣化と寿命について、考えさせられることも、多かったようです。

材料・部材等の劣化は、外部環境等による性能・機能の変化として、社会的インフラや建築物の損傷やその資産価値の低下や不測の事故、および世界遺産の存続にも影響を与え、寿命を早めることもわかってきました。また、自然災害や人災の際の危険度を高めることにもなります。気候・風土の影響もありますが、地球環境の変化も、紫外線や二酸化炭素等による劣化や風・水害等の自然災害の増大にも連なることもあるようです。長期的な実効的な対応策とともに、短期的・中期的な防災・減災対策を考えることも、重要なようです。寿命にも、材料・部材の寿命、動・植物の寿命、人間の寿命、人工建造物の寿命、文明の利器や製品の寿命、地球の寿命、宇宙の寿命など、いろいろあるようです。劣化現象がどのように起こるか、メカニズムの研究例は、多いけれども、それをわかり易く“見える”ようにする(「可視化」)とともに、寿命と結びつける話は、世界中でも誰も考えなかったようです。最近、ようやくその意味が理解されるようになってきたらしい。気象や地震や火山の噴火の予知と同じように、いかに寿命予測が難しいかが、実感されました。それでも、少しでも、実効性向上と精緻化を目指したいし、また、目指してもらいたいものです。

他方、私事で、申し訳ありません。

お医者さん、看護師さん、老妻等に助けられ、年末には、敗血症に進む恐れがあった、足の血行不良とばい菌の侵入による皮膚潰瘍や鬱血・壊死の危機的状況から脱して、ようやく徐々に快方に転じ、来年の春までには、二足歩行が可能になるまでに回復する見込みができ、夢と希望が湧いてきました。

今後も、リハビリテーションに励んで、知力・体力・学力の回復とともに、生命力の回復を図り、やり残した話の実現を図りたいと思います。また、来年には、中断していた諸学・協会の総会や同窓会等の諸会合への復帰を目指し、また、諸学・協会での研究発表と新たな特許出願の準備を行いたいと思います。数独パズル、クロスワードパズル、応用数学などを楽しんでいるので、頭の働きは、残っていたらしいです。ですが、インターネットを利用した囲碁、麻雀は、まるでダメ。よほど才能がないようです。しかし、懲りずに続ける積りです。

また、振り返りますと、Facebok で、昔、国際会議等を通じて訪れた、世界各国(フィンランド、スウェーデン、オーストラリア、カナダ、フランス、ドイツ、アメリカ、シンガポール、中国、インドなど)の素晴らしい風景や美しい街並みや庭園の映像、あるいは、山・川・

海の絶景や、動・植物の生き生きとした生態、美しい虹や星の映像、日本の桜の花や紅葉等に代表される四季の移り変わりの映像、神社・仏閣・花園のライトアップの映像が提供され、楽しむことができました。最近では、世界各国の世界的な建築家の名建築のデザインばかりでなく、無名の建築家等によるインテリア・デザインについても、映像および活字による情報を提供してもらえ、新たな感覚を養うこともできました。また、橋やダム、上水道等の土木遺産の映像や活字による情報も提供して頂き、社会的インフラの実態にも触れることができました。また、Youtubeを通じて、いろいろな諸国の民謡（スペイン民謡、ドイツ民謡、ロシア民謡、ネパール民謡、ペルー民謡、インドネシア民謡、中国民謡、日本民謡など）、フランスおよび日本のシャンソン（パリの空の下で、雪が降る、夜明けの歌など）、日本の懐かしの歌謡曲（青い山脈、有楽町で逢いましょう、喝采、ブルーライト横浜、乾杯、いい日旅立ち、川の流れのようになど）、東日本地震等からの復興支援ソング（スタンド・アロン、花は咲くなど）や、クラシック音楽（美しき青きドナウ、G線上のアリア、別れの曲、新世界「家路」など）、世界のヒットメロディー（虹の彼方に、百万本のバラ、禁じられた遊び、南国の夜など）を、楽しむことができました。Facebookのソーシャル・ネットワーク（SNS）で、いろいろな人、サークル、同好会、企画と繋がり、いろいろな情報発信および情報交換等を持つこともできました。有り難うございました。

また、電子メールや郵便、電話等を通じて、昔からの友人、知人、親族、仕事関連の人々等とのやり取りにより、貴重な情報交換ができました。ありがとうございました。

いろいろな自然とのかかわり、人等のつながりの中で、今年も、間もなく暮れようとしています。寒さが、厳しくなる折柄、また、想定外の天変地異も多くなると考えられますので、皆様、ご自愛ください。来年も元気にやりましょう。皆さま、良いお年をお迎えください。